始

紀行文集

みゞか旅

遠塚麗水著

71-577

紀行文集

旅かごみ

大正
4. 7. 17
内交

序

去年まで躬から耕せし裏の菜畠を耘りて、今年は友達の庭より乞ひ得たりし檀瓏琊數十種を栽ゆ、竹を添へて培ひし此の花の、梅雨晴れの朝な〳〵、美しく咲き初めたり。

寂寞柴門晝掩レ扃。　栽レ花紅紫逕成レ丁。
主人不レ管兒童事。　只剰鞦韆半畝庭。

汗漫の游び兩三年來の、紀文を集めしこの旅かゞみの校正終るの日、純白のスノードン正に其の蕾を破れり、折り來りて紫銅の小花瓶に挿み、之れを机上に置いて恭しく天下の山靈水伯に供養す。

大正四年六月念八

麗水　遲塚金太郎識

和田峠より見たる富士

白馬の村の夏

田舎の三味線

天の橋立

校倉の大藤棚

越後の浦濱

信濃川の歸帆

目次

一　花蘿蔔……一
　一より五
二　沖の小島……一五
　一より三
三　湯河原より……三三
　一　門川より　二　藤木川の滸より　三　胡蝶花
　四　眞鶴より
四　伊勢より京、大阪……四二
　一　鳥羽の日の山　二　明治天皇の行宮　三　九鬼の千本杉
　四　大廟參拜　五　二見の落日と日出　六　笠置山
　七　涙華の花、京の花

五　菜の花の國……六三
六　城の崎の三夜……六九
一　生野町　二　城の崎　三　温泉の町
四　田道間守　五　竹野の濱　六　但馬の海
七　應擧寺　八　矢田川の鮎狩　九　岡見の入江
一〇　岡見公園と玄武洞
七　舞鶴と天橋……九六
一　朝の舞鶴　二　細川幽齋と田邊城　三　舞鶴の入江
四　天の橋立　五　宮津の盆踊
八　松島と金華山……一〇九
一　柔美松洲に歸す　二　養賢堂　三　青葉城
四　洞雲寺　五　支倉六右衞門の墳　六　仙臺美人
七　鹽竈社頭の神樂　八　孔雀丸上の棹歌　九　桂島の佳眺
一〇　瑞巖寺と雄島　一一　松島の一夜　一二　金華山
一三　黄金山神社　一四　宛然たる蓬萊山　一五　峰頭の大觀
一六　鳳栖閣に宿す
九　天狗栖む山……一五三
一より五
一〇　釜無川の水源探勝記……一七一
一より一三
一一　手帳と萬年筆……二〇九
一　一茶の故郷　二　西山の油田　三　噴油の壯觀
四　柏崎の懐古　五　追分と美人　六　新潟の一夜
七　卷驛の金仙寺　八　岩室の樂郷　九　彌彦神社に詣づ
一〇　寺泊の一夜　一一　承久帝行宮の址　一二　聚感園と初君碑
一三　浦濱の奇勝　一四　間瀬の西蓮寺　一五　出雲崎の一夜
一六　芭蕉と良寛上人　一七　良寛上人　一八　夜の鯨波

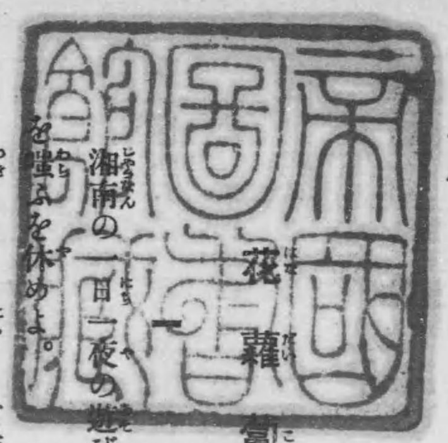
目次

一二　黄昏の嚴島……二六五
一三　日光の强飯式……二七一
一四　三佛堂の延年舞……二八〇
一五　日光神輿渡御の行列……二八三
一六　菊の長者莊……二八六
一七　飯能の一日……二九九
一八　秩父の長瀞……三〇三
一九　諸國酒物語……三一〇

目次終

旅かゞみ

遲塚麗水



花蘿蔔

湘南の一日一夜の遊びを記して、花蘿蔔といふ、題筌の平俗なるを嗤ふを休めよ。

月の二十六日は、好晴近來稀に見るところなりき、朝八時十分新橋發の横須賀行急行列車に搭ず、新雨新に霽れたる紺碧の天の一方

に、二個の飛行機の盤旋するを見たり、嫩き夏の意の浩蕩たる大荒の長風に駕して、人間を螘視する機上の人の雄心を想ふて、眼の力の盡るまで見送れり、汽車は短亭長亭を後にして、程が谷、戸塚、鳶尾草を棟に栽ゑたる茅屋の、或は嚮ひ或は背きて、官道の松並木に傍へる菜の花の村又麥の郷、誠に廣重の活粉本なり、相摸路の此には、不思議にも昔の驛の面影を留めたり。

汽車は青葉の山に傍ふて鎌倉に入る、昨夜の雨に洗はれて、青光る貝殼道を辿り行きて、扇谷は壽福寺の林に近き比田井天來の莊を敲く、書に隱るゝの逸士と豫て聞ければ、定めて皓髮童顏の翁なるべしと想望しゐたりしに、料らざりき出で迎へたる其人は、豐面疎髯の丈夫にて、若し其髯を密に且長からしめなば、端的に是れ關羽字は雲長の相貌なり。

天來と余とは、夙に相識るべくして、而も相遭ふの機緣熟せざりし也、今や端りなく相會へば、一見誠に故人の想ひあり、日南の緣側に青竹の欄干して、金毛の熊皮と雪白の羊皮とを晒したる、四壁に千卷の書を積み重ねて、半ば障子を啓きたる緣近く、大いなる朱檀の机を置き、小硯細筆、物の本に硃をもて何をか註しゐたる、唐の隱者めける風趣あり、此家元は蠶室なりしを改め作りしものなりといふ、實に大茅葺の屋根の棟に、龕のごとき二箇の採明窓の置かれたるを見ても其れと知れたり、天來氏笑つて曰く、余は蠶氏の國

を簒奪して、其僭王となれるなりと、曠懷喜ぶべし。

二

日は午なり、莊を繞りて鷄啼く、扇谷は晝靜かに、風は若葉の薫を吹き青みて坐に入り來る、雨の過ぐるがごとくにして最と涼し、解事の細君酒を侑む、壁間の書架より拓本榻本、手に任せて亂抽して且つ飲み且つ看る、凡そ周篆、漢隸、魏楷、唐草、千古の群妙、看て心醉す、別に蘇東坡の書けるところ前後赤壁の賦あり、筆力豪宕、具さに緩急潤渇の趣態を盡せり、耽觀之を久しうす。

天來莊を出でゝ、端りなく吾が友香川魁庵の雪の下に棲遲せるを憶ひ出して、途に其門を過ぎれり、麥酒を茶に代へて語ること半晌ばかり、庭につゞく麥田菜圃、若宮大路の松並木、魁庵世にすねて此に隱れ、晴には花に灌ぎ雨ふれば書を讀み、斗酒時に胸中の磊塊に澆ぎて不平を遣る、亦一奇士なり、其の時事に慷慨して、魁庵も余も餘りに聲高く相論じたりしかば、偶隣房に午睡の夢圓かなりし幼き人を驚き醒ませし、慌だしく坐を起つて門を出づ。

去年の霜月、ふとしたる事にて左の脚を傷つけし以來、都の外に遊びしは飯能二日の旅のみなりき、其の創今は大方癒えて渉躋の具に富みたる元の身となりては、此の儘歸途に上らむは最と惜しゝと、旅珍らしき心は動いて、大船より折からの汽車に搭じ、先づ小田原なる石塚國手を訪れたり、石塚氏は人も知る鼻の醫者、鼻の病にか

けては妙術人を驚かす、煙茶少時の物語りするほどに、國府津の小栗貞雄氏より電話あり、今日しも客の來れる約ありて晩餐の用意したるに、遽に障ることありとて終に來らず、君を邀へて一夕の歡を盡さんとなり、奇緣又た妙緣、石塚氏と共に電車國府津に赴く、酒匂の川を渡るころ夕榮の富士を見る、凝紫一堆、雪を戴いて青冥の上に立つ、端りなくも『江は漲る鴨頭綠、山は含む佛頂青』の句を獲たり。

三

小栗氏の岳洋莊を訪へば、衡門のうち茅は早や青を抽き萩も亦た嫩葉せり、幾年前の秋の夕、微月を踏みて莊の門を敲きし時、白芒高く星を拂ひ萩花嫋やかに露を帶びて、三逕の秋の趣いと濃やかなりしを見たり、此の秋の風情も亦偲ばるゝなり。

樓に上れば溫顏の主人と相對して村井弦齋氏及び夫人ありき、氏と相見ざること數年、今端りなくもこの莊に邂逅す、正に奇緣なり、欄頭に薄り來る相洋の三十六灘、暮潮紺を漲らして初島大島有無のうちに在り、石橋山、眞鶴岬、風煙淡く海に拖く、更に西の窓を開けば、窓一杯に人を窺く沈黑の富士の山あり。

肴核は既に几上に陳せらる、小栗夫人の自ら調理したるもの、皆珍饌なり、主客六人、弦齋氏は素より杯中の趣を解せず、主人も亦近ごろ酒を廢し、蕉量ながら石塚氏と余とのみ酒陶を占斷し、主人

及び夫人、弦齋氏夫人皆な曹達水を攝る、弦齋氏、近ごろ書痙を患ひ、針治して稍や瘥ゆ、曰ふ萬年筆を用ゆるが爲めなり、毛筆を用ゐなば、柔軟にして此病あらざるべしと、石塚氏曰ふ是れ血行の鬱滯なり、酒を飲むに若かず、美醺陶然として血行甚だ佳、兼て内臓の運動を促がす、今後勉めて天の美祿に親しみたまへと、主人先づ贊し、弦齋夫人亦た贊し、毎夕兩三杯づゝ侑むべしといふ、一座譁然たり。

膳に『さつま』なるものあり、熱飯に和すること山薯汁のごとくにして之れを食ふ、甚だ滋味あり、是小栗家房厨の秘法にて、其の製法は、先づ新しき鯛を割いて其の精肉を炙り、櫑鉢に入れて之を粉末にし、別に胡麻及び味噌を擂りてこれを漉し、鐵板に捺布して之れを燒き、前の魚肉の粉末と和せ、豫て養出し置ける魚皮魚骨の肉汁を濺ぎ、再びこれを擂りて汁となしたるものと、尤も滋養に富む。

四

小栗氏の岳洋莊を出でゝ小夜闌の電車に上る、月昏く波黑し、松籟一路を電車は唯ひた走る、禿頭翁二人、各丸髷に結たる若き女を伴ふて乘れるあり、余等のあるをも憚らず、倚翠偎紅の痴態を作す、女は媚めかしき京語を操り、兩禿顱は輕薄なる大阪辯をものいふ、さてこそ知られたれ、狎妓を拉して大正博見物と洒落たる歸途を、今宵は箱根の湯の宿に過ごさんとするなるべし。

石塚氏の莊に歸れば正に十二時、莊前の噴泉より寒冽氷に似たる

井華を汲みて、且つ沐し且つ澡すれば、凉氣脾肝のうちに徹透して醒後の清味ものゝ喩ふべきなし、石塚氏は厨裡に索めて此の夕新に網に上りたる鯛を割かしめ、更に酒を暖めて飲む、氏曰ふ、相摸の清流酒匂川は、哲人二宮尊德先生を生めり、先生の眞貌を寫したりといふ先生の木主に對すれば、其の鼻の端嚴なる、誠に此の哲人の人格を表現せり、延いて其の先考の鼻を憶ひ、遡ぼりて更に祖先の鼻を憶ふ、余は其の遺傳の如何に純潔精美なるを想ふなりと。

更に又酒匂川の生める奇士を擧ぐ、名は河村權七、加藏嘉明の臣なり、一旦主の旨に悖ひ、仕を致して奥州に入り荒蕪を開拓す、之を久しうして石田三成の亂あり、加藤氏の夫人時に質として大阪に在り、權七星馳して大阪に赴き、夫人に謁して甲冑を攝せて男裝せしめ、馬に載せて自ら其轡を執り、白日公然大阪を出で、加藤氏の許に送れり、加藤氏も亦豫てより權七の心事を知る、其の手を執りていふ、汝が吾が麾下を去りし以來、幾年の俸祿を蓄へて汝が再歸の日を俟てりと、出してこれを與ふ、權七感激して報效を誓へりと、逸史又傳ふるに足る。

一番鷄の啼くに驚いて、氏を促して寢に就かんとす、興いまだ盡きず、寢ながらに語らんと、室を隣て相寢ね襖子を開放す、屋を繞つて蛙啼き、又遙に御幸が濱の濤聲の雨のごときを聞く、閣々たる吹鼓の聲は、澎湃の聲と和して、半醒半醉の枕に通ひ來るなり。

五

枕を欹だてゝ静かに蛙の啼く音を聞く、昔の人は蛙の啼く音を蛤の貝を擦り合はす音に喩へたり、喩へ得て其の形似を捉へたれど、いまだ眞ならざるなり、何をか之れに喩へむ、白象牙の球を執つて、之れを玻璃盤上に輕く拋うてば、球跳つて憂々の清韻を引くに喩ふべきか、されど是も亦眞ならず、唯だ閣々たる自然の吹鼓として聽くべきなり、而も其玉喉聲を含んで旋轉するところ、妙音實に人間の物にあらざるを覺ゆるなり、聽いて之を久しうし、又自然に歌律をなすかを覺ゆ、かかかかか、ここここかか、かかかかこ、正に十七字詩なり、かかかかかかかか、かかかここここ、正に三十一字詩なり。

曉色縹く窓櫺を染て嫩寒さながら秋に似たり、遙に波聲を聞き、波聲に交りて人の號ぶを聞く、鰹舟の御幸の濱に歸り來しを、舟夫の聲を揚げて遍く漁家の人に告ぐるなり、其魚の背の色に似て、鮮碧のうち暈せる幾條の藍を交えたる曉の空は、晴やかに澄み渡れり。

噴井を汲みて顏を洗ひ髪を沐ひ、大縞の單衣のみして帶を緩くし、山吹咲く庭を步す、泉水の邊り、隱士供養と勒せられたる自然石の碑あり、竹添井々翁の書し本阿彌翁の刻するところ、石塚氏の、刀圭に隱れたる先哲の爲めに建つるところと云ふ、其志や欽すべし、床の間に一幅あり、双行の字を書す、曰く『醫を業として敢て醫を

說かず、書を讀んで甚だ書を解せず、動は以て衆生を拯ふに足り、靜は以て一理を睹るに足る』と、氏其れ期するところある乎。

歸途大船を過ぎて、淡紫の花攤がりて野を掩ふを見る、太だ綺麗なり、傍の人に質せば其の人嗤つて曰ふ、君は大根の花を知らざるかと、定めて菽麥を辨ぜざる痴人と思ひしならむ、湘南二日の遊記に題して花蘿蔔といふ。（大正三年六月）

沖の小島

一

風濤一夜、夢きれ〴〵に擾されて圓かならず、ふと眼さむれば空氣枕の漏れ萎びて、頭は酒に中られしがごとく痛むなり、雨漏の痕、蠅の糞、煤垂れし天井より吊られたる五分心洋燈の、誰が徒然の夜半に筆を染めけん、火の用心と、蚯蚓折釘さま〴〵に書かれたる破笠傾げて、脂色の火影かすかに窄き室を照らしたり。

伊豆の島巡りを思ひ立ちて、同遊の士十二人、月の十一日、新潮の薫高き黄昏の靈岸島に纜を解きたりしが、夜開けて烈しき西風吹

き起り、浦島の子が歸らむ海路の凪日和は、胡の艦の寇し來る夜の濤と荒れ、曉縹き大島の山影を、立ち罩たる潮烟の外に看めつゝ吾が船伊東の灣に假泊したり、溫泉に半日、其の夜半復も船に上りてほの〴〵と明くる大島、櫻さく島、椿の鄕、御神火の燃ゆる山、髪長き女人の國、世は遙かなり大巳貴の王子事代主の神、島毎に一人の王妃を置いて、黑潮や天の磐舟うけわたし、此の南荒の民を治めたまひしと傳ふる島に居ること半日、投島田の髪を裏む縮緬絞纈の紺の手帕、伊達の朱襷したる島の女の、頭に水盛る桶を載せ薪を置いて、落椿の石の逕を嫂婷と優に歩みながら、

『妾や大島御神火育ち、
胸に烟は絶えやせぬ』

と、懷春の情緒を此の短かき詩に寄せて、歌ひつめたる其のさまの趣き多きに先づ游目の興を催ほし、散策の汗滲む額を拭ふて、一杓の牛乳に其の渴きを醫しては、一合の價僅かに一錢なるに驚異し、夕に其の葉を採つて茹へば、明日には既や繁りて青々たりといふあした草の、獨活と芹とを合せ味はふに似たる菜を咬みては、香脆食ふに堪へたるを愛し、旋て再び纜を解いて、紺碧の海の眞中に峭り立つ金字塔形せる利島の荒磯に艇を寄せ、島を擧げて皆な老椿、花さく時、酣紅、山を燃かんとし、月なき夜の黑潮も微かに明かしといふなる其の幽蛙の路を行き、一脈の泉さへなき此の島の、水は酒

よりも貴くして、家毎に屋を繞りて甕を置き、廂の端には桶を架し、樹の枝よりは繩を垂れて、雨ふる時の涓滴を湛へ貯はへ、もて日常飯菜の用に備はふるさまを眺めつゝ、島守の巡査の其の妻と寂しげに飯くひ居たる門を敲いて少憩し、妙齡人に歸ぐ島の女の、其の粧奩の資料に多くの水甕を齎らし行くを矜とし、一杯の水を與へんといへば兒も亦た啼を止むるなど、水に渴きたる孤島の人の慘はしき生活や、自然の寵福は全島の椿にて、油を採りて年產六千圓の利益を得、魚蝦の利も亦た之れに副へば、島に甚だ貧しきものなしなど語るを聽き、島に留まること二時間、還つて復た船に上り、長風散髮、舳頭の騁望を擅にし、今宵の船の泊まるべき新島の沖に來りし折しも、急飈遽かに吹き起りて、船を繞りて皆な濤、海氣黃莽、白妙の眞砂を布くといふ白濱、大三の王子の社在りといふ宮塚山、看れども見えず。

長濤、銀の山を推倒して、吾が艇幾たびか呑まれんとしたる時の余等は、唯だ冷やかなる汗を兩掌に握りて、坐ろ荒南に奇を搜ぐらんとて來しを悔いぬ、島の人、海豚のごとく波を潛つて吾が艇に泳ぎつき、舳に盤踞を卷ける太綱執つて拋うてば、雙頭の飛蛇とばかり宙を騙けりて濱に立てる島人の手に落ちぬ、狂瀾更に吾が艇を掀ぐると見れば、十丈の深壑眼前に現じ、艫倒しまに天に朝して舟中の人皆滾轉す、唯だ狠雹の面の上を亂れ撲つを覺えて、生ける心

地もなかりしを、何時しか余は濤に逐はれて荒磯を走しれる島人の背に在りき、驚定まつて始めて破顔、相喚び相慶して、淋漓と濡れし衣や帽や、潮の華は霜と光るを拂ひもやらず、霎爛せる火山岩の、一歩ごとに頽れ潰えて、風沙面を撲つ中を辿りて、小笹を網代に編みし低き垣の幾曲、辛くも旅館を覓め得て門を敲けば、先客早や既に沓至して多からぬ室を殘らず占領し、前夜、村に火災ありて六十餘戸を燒きたれば、他に宿るべき家もなし、余等遑惑、環り看ねたりし島人の、魚の鱗の青く光れる襤褸さし男を拉して駐在警部の宅に導かしめ、事情を告げて巡査の案内にて、僅かに宿を求め得たりしは、此島唯一の料理店、『妾しや新島荒濱育ち、色の黒いは親譲り』なる釧目式の廂髪二人ある、腐魚敗醬の臭鼻を撲てる、極めて湫隘なる此の家にてありき。

二

曉の窓を推せば、網代垣、草の屋根、有明の月の影か別れの霜か、唯だ眞白にぞ見渡されぬ、こは夜を籠めて吹き荒める西風に捲き篏られし眞砂にてありき、風力尚勁、吾が船は地内の嶼蔭に假泊す。

朝餐の膳には臭屋の乾魚あり、下町式の通人が額を批ち舌を鼓して妙でげすなと歡味する斯の物は實に島の名産たるなり、鰹の刺身、鯛の濱燒、老蝦の具足煮など、常に海客の誇り説ける佳饌を此の島に喫飽せんと想ひたりしに、風荒れて海の幸なく、饔餐の余等をし

て頗る此の膳上の異味に顰蹙せしめたり、唯だ茹でたる明日草の咬むに足るものゝのみ。

門を出づれば風何時しか衰へて、空は紺碧に晴れ渡れり、忽ち鼓聲の蓼々たるを聞きて顧みれば、女面獅身の形したる高き丘の頂に、長髪肩を掩へる異様の青年、大太鼓を腹に載せて短槌交も打ち鳴し、『見よや十字の旗高し、君なるイエスは先だてり』と、讃美歌を高唱するなりき、小笹の垣、椿の門、狗を曳く村の童、水桶を戴ける島の女、走りて風砂に草白き邱に上り、青年を中に圍みて、或は立ち或は坐して其の歌を聴き居たり、雲濤は前に在り、碧落は上に在り、潮の高き海風に鬢髪を吹きそよがせつゝ、顔燃るがごとく紅くなりし青年は、嫩き血の沸るかと聲高く、『勇め武士いざ勇め、十字の御旗先だてり』と歌ひつゝ、徐かに邱を下りて村に入れり、蜃雲蟹雨、荒南の小島に來りて道を傳へ教を宣ぶる此の青年、島人は白き齒を彈いて狂人と嘲り、心なき頑童は石を抛つ、而も其の中に在りて優容として吾が使命を樂む、其の熾烈なる信仰と痛快なる行爲とは、坐ろ余をして感動せしめたり。

篠竹を網代に編みて、上に其の葉を挿み添へたる垣を家毎に結ひ繞らせり、路は霞爛せる剛化石の砂深くして、歩めば珊々として聲を作し、雨ふれども潴せず泥せず、土瘠せたれば砌に竹樹なく、宅前に圃を造くるものゝあれども、菜蔬矮短にして生色なし、往來處々、

鯨骨を敷いて堦を作れるものあり、家々の婦、茹でたる甘藷を臼に入れ、杵を踏んで搗き碎く、黄泥のごとし、これ島人の常食なり、晒してこれを貯はへ、米及び明日草を交へて雑炊となす。

劫灰殘墟、家毎の土窖に藏められし甘藷の焦げ薫ぼりしを掘り出して、亂髪垢面の人々これを啖ひて朝餐する悲慘なる火災の跡を過れば、剛化石の短墻に圍まれたる瓦屋根の相隣れる一區あり、裁判所、島役場、郵便局、判事某、檢事某と記せる標札ある椿の門、櫻の扃は其の官舍なるべく、本日豚ありなど貼札せる家もあり、大島を除きて他の六島の統治機關は此に集まる、之れを過れば雲木蒼々たる十三社大明神の境域なり。

家は蝦の莊とばかり砂に建てられ、人は蟹の子の如く砂に栖める此の滿目の爛沙極めて荒涼たる島の中に、思はざりき斯く深く邃けく靜かに美しき茂林に逢着せんとは、波の青さと沙の白さに見飽ける余等は、この頽嵐峭綠の神の森に入り、衣帽を染むる翠微を嚊いで座ろ心氣の新たに蘇するを覺えたり、事代主の命、長矛大劍、斯の島に臨み、其の王妃、其の王子と此の山に宅したまひし邈古の事は知らず、實に神寂びたる此の森よ、深綠のうち尙ほ殘紅を點破せる老椿の木は言ふを俟たず、杉や、檜や、槇や、櫟や、老幹高く雲霄に入る、其の下に生え繁る草や木も、南國の日に欣榮あり、一丈を踰ゆる茗荷、人の身長より高き水仙、茗荷は島人裂き打つて筵を

作り、水仙の花は大さ碗に似たりとぞ、齒朶は鳳尾を張り、棕梠、蘇鐵は大扇、風を簸る、又た縮紗多し、島人朱の子を採りて藥となす。

唯見れば數人の媼あり、皆な紅き帙布して手に箒を執り、賽路の落葉を帚ひ居たり、余等を京客と見識りけん、帚を停めて哂つて相近き、環り立ちて慇懃に默禮したり、何事をするぞと問へば、中に最も老いたる媼進み出でて、妾等は皆な六十路を踰えたり、家を吾が女、吾が婿に任せて世事には與からず、唯だ神、佛の庭を洒掃するを其の日の課業とするなりと答ふ、尋常の島人は紺の手帕にて髪を裹めるを、紅き帙布するは何故ぞと問へば、神詣、佛參する時は、紅きを頭に加ふるが儀式にて、身の穢れ、心の穢は紅き布にて祓はるゝなりと答へつゝ、余等の顏を回看して、眞に皆樣好い殿御振よな、妾等も齡をとつても無病息災、今年の盆には誘ひ合せて月夜の篝火で若衆に交りて踊ますだと、窄き袂を翻して歌うたふ。

『枝垂柳の葉の零ちて、池になるまで御身と添ふ』

天眞爛漫、まことに愛すべし、恬澹として天命を樂しめる新島の女人は幸ひなる哉。

三

朱の華表、粉碧いたく剝落せる茅葺の隨身門、門を入れば一泓の池ありて、白苔錢の如く爛斑せる石鼓橋の架りたり、社殿は寶永年間の再造に係るものとぞ、誰が筆としも知り難けれど、內陣の楣間

に懸けたる三十六歌仙の繪額いと鮮麗なり、社後は菲廡烟んとし、紫の濃き淡き壺菫、脚を着るに處なきまで咲き亂れぬ、一抱に餘れる老櫻樹あり、單瓣にして花尤も大、盛りを過ぎて霏々として風前に散落す、傍に立てる島の童子に錢を與へて攀ぢて一枝の花を折り採らしめ、人毎に數枚を頒ち得て手帳に挿み好箇の記念となす、還りて賽路を行けば、左右深樹のうちに小社相望んで立つ、石の堦、茅の廂、いたく荒頽すといへども、洒掃して寸塵をとゞめず、彼の媼等は、紅、青、鬱金など裂いろ〳〵を綴り作れる小さき袋より、珠なす濱の眞砂を掬ひ出して龕前に布き夷し、米一摘、防風の二葉三葉を其の上に供へて神に捧ぐ、小笹の先に白き紙を挿みて幣とした

るが、矼道の左右、さては崕陰の石を繞りて立てるあり、龕の中を窺へば、紙にて巧みに剪綵したる菖蒲の花を柱に倚ふて立てしあり中に鎭西八郎爲朝の祠もあり、笹の幣束、殊に多く簇がりぬ、祠傍の老杉、太さ合抱、高さ十餘丈なるがあり き。

賽し終りて復た村に入り、更に波伏の濱に向ふ、危磴を登れば觀世音堂あり、偶々大蛇の走るを見たり、長さ七八尺、太さこれに協ふ、草萊靡披、之くところを知らず、波伏の濱に通ふ一路は深樹殊に幽寥、落々たる長松、盤桓せる老椿、椎や、槇や、たぼの木や、柯枝狼藉、相交つて戟のごとく、仰いで日光を見ず、其の後は則ち島中の第一高峰、宮津加の葉山繁山、斧斤猥りに入るを禁じて木を

伐るに時あれば、まことに鬱々蓊々然たり、波伏の濱、白砂さながら雪のごとく、其處に嫩き葉を抽く防風の、鬱金の芽、紅き莖、此處に一團、彼處に一團、いと麗しき模樣を描けり、曾て海嘯、島の一角を奪つて海中の山となしたる地内の小島は前に在り、式根島、神津島、近碧、遠青、夏の意は海に充ちて浩蕩たり。

荒磯を傳ふて行くこと數町、波幾たびか路を奪ひぬ、黑根の峭蛭、巖古りて松奇なり、山を極むれば大三王子の祠あり、騁望太だ濶し、日や今ま亭午、荒南萬里の濤を射る、健鶻低迷、其の影を沒するの邊は是れ八丈島か、快男兒鎭西八郎が、雙々飛び去る青鷺を逐ふて一蓬杳然として流虬洲に入りし故事を想ふ。

偶々鼓聲の深樹の中に聞ゆるあり、聲を尋ねて進みて行けば、茅屋のうち、亦た數人の老媼あり、集まりて神樂歌をうたふなりき。

『神の社でうづらがふきる、何とふきるか立寄り聽けば、當所御繁昌と言てふきる』

靈鶉、晴に鳴いて好音を傳へ、海に幸あり、豐漁當に全島を潤すなるべしと祝福するなり、老媼、余等を座に招き、黑砂糖を丸めたる鐵砲珠を出して侑む、語ること少時、人遠く世迢かに、恍然、仙境に異人に逢着して逍遙游するの想ひありき。

此の夜、風力復た勁、吹いて明旦に至る、余等既に遍く島中を討尋して無聊殊に甚し、而も舶は何の日か纜を解くべきぞ、將に朝餐

の膳に向はんとする時、人あり告げていふ、海上浪高し、吾船下田港に避難すべしと、皆な箸を抛うちて結束し、走りて海濱に赴けば日陰りて風烈、狠雨、面を撲つ、漁夫を呼びて艇を出さしむ、皆頭を掉つて肯かず、賞を懸けて強て艇を卸さしむ。怒りて起つ濤、吼えて頽るゝ瀾、艇幾びか覆へらんとす、艇に乘るもの余等五人、一行多く島に停まる、僅かに吾が祝丸に上る、十時纜を解いて伊豆下田に嚮ふ、顧れば懷かしき吾が新島は、既や雲濤の外に一堆の青螺となれり、日は復た晴る、何の海禽ぞ、波を掠めて群れ飛ぶあり、日華其の翅を映射して閃紫又た閃紅、言ふ是れ文鰐魚の飛ぶなる也と。（明治四十五年四月）

湯河原より

一　門川より

病後の母の湯河原に浴みせんと思し立たるゝに陪して、月の二十二日の朝新橋を立つ、紅き、青き、黄、紫、いろ〳〵の色紙短冊を敷きつらねたりとも見ゆる野の紫雲英、畑の菜の花、穂を抽く麥、坡の蒲公、隴の蠶豆、葱の花、徂く春の歌屑はそこより起つか、空に二列三列の鴈の文字遠く、嫩き夏は、車の窓より人を覗き過ぐる燕と流れて、若葉の東海道の看めや心地よし。

小田原に午餉したゝめて後、輕便鐵道に乘る、米神、根府川、江

の浦、眞鶴、路は常に青葉の山を負ひ、青海原に傍ふて走る、日はやゝ陰りて風強く、波は荒磯の岩を撲つて雪と頽れ雷と吼ゆ、村や處々、取り殘されし春は寂しさ幾株の緋櫻の慌たゞしく散るありさま、余には熟路なれど母には生路なり、野店の前に車の停まる時あれば、降りて茶を買ひ蜜柑など擘いて車の窓より進む、山陽頼氏、母を奉じて輿行するの詩あり、曰く、輿行けば吾も亦た行き、輿止まれば吾も亦た止まる、輿中道上語りて綴まず、歴指す某山と某水と、時あつては俯して襪結の解くるを理む、母兒を呼んで前む、兒曰く唯、——兒に於いては熟路なり母には生路たり、雙眸常に嚮ふ母の視るところにと、余も亦た此情趣なきにあらず。

二　藤木川の滸より

眞鶴を過ぐるころより雨ふり出でたり、窄き車の、玻璃もなき窓より吹き入りて面を向けがたし、手帕を取り出でゝ帷に代えたれど婆娑と簸りて用をなさず、母めづらかに風濤の奇を看むるに、余も眼鏡に暈る雨の痕を拭ひつゝ、其の昔頼朝が鳶が窟の偃木の陰より二羽の山鳩啼き起ちて奇しくも生命を助かり、海人小檢校が船に乘りて、安房さして遁れ出でしところは此の邊なるべしなど物語る。

波、門川の磯を洗ふて、海氣まことに腥し、車、此に停まる、湯河原路なり、母を扶けて車を下れば、茶屋の女房まめやかに行李を運び車を喚ぶ、此の村今年の春の初、祝融に咀はれて殘るかたもな

く焼け亡せ、焦げたる立木、頽れし殘礎雨のうちに荒涼たり、石多く泥深き路は斜に山に入る、車の行くこと遲し、玉を束ねて流すに似たる一水涓々として人を迎へ、處々に架けたる水車の軋々と鳴りて、自から一種の諧律音を作すに覺えず睡を催して、少時は忘我の境に入りしが、やがて車は山の懷に入り、市廛の間を過り、豫て報らせおきたる某の旅館の門に入る、門川より此までは、一里にして近し。

湯河原は南に岩戸、日金の山を負ひ、北と西は箱根の連峰、南湖、聖嶽、鞍掛の山に懷かれて、藤木の溪に沿ふ、地勢は宛から修善寺に似て其の規模を小にしたるものゝ如し、溫泉は澄みて色なく臭氣なし、尤も金創に效ありと、余の宿りし此の家は町の奥にて、山に近く溪に傍ひ、旅館のうちの巨屋と稱せらる。

三　胡蝶花

主婦を先に幾曲の廊下を傳ふて、母の意に適ふ室を點檢し、庭に向かひし唯ある一閑室を擇びて其處に行李を卸す、簷に青葉の山近く、一泓の池ありて今を盛りの汀の杜鵑花、魚をり〳〵跳り、圓波漾漾として涵せる花の影を靜かに搖かす。

勿體なしと思ふほど湧きて溢るゝ溫泉に入りて後、雨烟る夕の山を看めながら膳に對す、山菜海魚の饌は甚だ薄けれど、痾を養ひて靜かに息むには相應しゝ、灯の上るの後、母は齋らし來りし茶器を安

排して茶を淪じ、兒や机に隱りて今日の日記を作り、兒の婦や行李のうちの衣裳を整理す、宵淺うして一境太だ閑靜なり、溪聲遠くより蛙の啼く音を帶び來り、誰人の風流にや、小鼓に和する小謠の聲を聞く。

翌、獨り早く起きて浴室の湯瀧を浴び、曉標き小雨のうちを傘をもさゞず、藤木の溪の滸を傳ふて山に入る、行くこと五六町、石の逕窮まりて柴の小橋溪に架かれり、汀は都て胡蝶の花、水は昨來の雨に肥えて奔湍雪を噴き、溪畔の花や風なきに披靡して瑠璃流れんとす、やがて山吹さく草の門あり、一小遊園をなして中に茶亭あり、蕎麥を賣る、當面の絶壁より所謂不動の瀧は懸れり、高さは五六丈、兩條の瀧、一は直下し一は斜めに走る、水は瘦せたれど亦看るに足れり、茶を乞はんとて茶亭の扉を叩けども、主人睡つて起きず、流鶯數聲。

四　眞鶴より

雨に和して胡蝶花兩三枝を折り採る、歸りて床の花瓶に挿け、瀧と溪との美しき境趣を此の花に寄せて母に物語らんと思へばなり、柴の小橋に少留して藤木の溪の上游を回顧すれば、青葉若葉の山幾重、細く降る雨に烟り、青く流るゝ嵐に澹れ、夏の意は浩蕩として人を吹く。

やがて雨歇む、故と來し路に踵を回せば、藥師堂あり、近ごろ成

湯河原より

りしものと覺えて、門も本堂も新しく、根府川石の石磴に苔さへなけれど、堂後は木昏く岩古りて、寒劒の石を劉るばかりの勢して飛泉懸れり、藥師の瀧といふ、兩大戰役の時、傷病勇士の澡浴したるところと短碣に誌されたり、堂主等を執つて堦前の松釵を箒く、山鳩連りに啼いて雨を喚べり。

旅館に歸りて飯、飯後更に一浴し、母と婦とを留めて余獨り車を命じて歸途に就く、胡蝶花一輪挿んで帽廂に在り、車夫行く〳〵語るらく、不動の瀧の蕎麥屋の夫妻は、此の里の人ならず、夙くより相思の歡ありて双親に容れられず、家を出でゝ山に入り、草の庵を結びて共に棲み、身を瀧守として蕎麥を客に供め、山菜溪魚、怡然として貧を忘る、所謂竹の柱に茅の屋根、手鍋提げても厭やせぬ底の小説的生涯の人なりと、藥師堂主亦緇流の畸人にて、客の爲に貌を相し且つ禍福を筮ふと云ふ、蕎麥を食ひつゝ綺話を聽き、香を焚いて妙諦を談ず、共に風流なり、余、彼と語るの閑なかりしを憾む、顧みれば湯河原の山はや雲の中に在り、雨絲風片、情を惹くこと濃やかなり。

湯河原より山に入ること三里にして、箱根の蘆の湖畔に出づ、湯河原の客は常に駕籠を僦ふて遊び、一日にして往來すといふ、附記す。（大正二年五月）

伊勢より京、大阪

一　鳥羽の日の山

雨煙る月の二日、傘傾けて鳥羽の日の山に登り、洸洋たる海の景色を看めたり、鳥羽には故き日和山の名所ありて、海山の眺めを專らにしたりしが、近ごろ和泉の人筧山樵夫といふ人ありて、鳥羽の背に聳えたる樋の山の青嶂を買ひ、道路を通じて車行の便にし、花木を栽ゑ茶亭を置き、もて遊覽の區とはなしたり、日和山より高きこと更に二百尺、高處の眺め遠處の望、隱るゝところなくして其の大觀を盡したり、『千里の眼を極めんと欲して更に一層の樓に登る』

の想ひあり。

漁莊、蜃舍の幾灣々を看渡して、桃取、菅、坂手、原、浮島の大小島より、青螺一點、積水の上に浮べる神島かけての眺望は、人稱して志州の松島といへり、海潮の明淨なるは松島の比にはならず、但し松なきを奈何せん、中には兩個の村、二千口の漁樵を棲しむる大島の、山高く樹暗きありて、其の諸島の布置安排は、松島の綺錯と明麗との觀を缺きたり、余をもつて之れを見れば、尾の道の千光寺畔より玉の浦一帶を聘望したるの景に較ぶべきを思ふ。

樋の山は、九鬼嘉隆、海城を鳥羽に開きし時、此の山の懷に湧く泉を湛へ、樋を伏せて之れを城中に引きたるに因みし名なり、老樹

鬱蒼、高きに登りて俯瞰すれば城中隱るゝところなければ、昔は此の山に入るものあれば刑せらる、維新の後、私人の手に落ちて樹木は濫伐され、山は更に幾代の主を代へて今に至れるなり。

二　明治天皇の行宮

鳥羽の矜とすべきは常安禪寺なるべし、明治十年二月、明治天皇の行宮なりしが爲めなり、天皇、軍艦龍驤に御して大阪に幸きしたまふの途次、遠州洋上風濤大いに起り、魚龍太だ驕りたれば、遽かに御船を此の浦へ寄せたまひき、其の昔九鬼嘉隆が朝鮮より伴ひ還りし捕虜の明人を、抱關擊柝の役として留め置きし唐人門の舊趾ある磯邊より御上陸あらせらる、町の民、非時の事として驚き畏み、兎も角も寺僧と共に此の寺の一室を洒掃して迎へ奉つる、龍駕此に駐りますこと一日、翌る日は風和ぎ波平らかに、天顏殊に麗はしく再び御船に上らせ給ふ。

『浦風も荒磯波も今朝なぎて
　鷗たちたつ鳥羽の海面』

とは、一夜の風濤を此の寺にわびしく在せし其の翌朝の御製とぞ承はる。

黃檗の木庵が書きたる『玉龍山』の額を懸けたる寺門を入れば、一庭沙明らかにして臥龍松あり盤桓す、右には香積臺、右には步廊ありて斜めに本堂に通ず、降るとも分かぬ春の雨は、酥のごとく大

廡の碧瓦を潤して、簷は不斷の珠を隕し、樋に傳うて鳴つて木琴を打つの聲をなす、流鶯時に啼きて晝は更に寂寥なり。

本堂に入れば左に黄檗隱元の筆『獅子吼』の額を掲げ、右に此の寺中興の傑僧巨海東流の書するところ『丹鳳簟』の額を懸け、優婆塞、優婆夷の兩座を設く、佛前の香猊、烟を吐いて絲々寶龕の邊に低迷す、導かれて廊につゞける鞘橋を渡り、石瘦せ苔肥えたる泉水の邊を過れば香積臺の一室にて、明治天皇の御座ありし處なり、凡そ八疊二間、別に六疊二間あり、襖子は故り疊は黄み、鳥羽の風景を描ける土佐風の繪屏風一雙立てり、粉彩多くは剝落す、皆な當時の儘にして些しも更ため替ることなしといふ。

正面の床の間には、極めて粗末なる松板に『行在所』と書されたるが安置されたり、遽かなる御幸の事とて、行宮の門に掲ぐべきものなかりしかば、慌ただしくも此の板を索め得て、扈從しまつりし長三洲の謹んで毫を執りしものといふ、別に行燈あり、尋常一樣民家に在る角行燈にて開き戸なるが、蝶番にブリキを用ゐたるなど、一穂豆のごとく、聖主半宵の御夢を護りまつりしを想へば、畏こしとや亦た畏こしや。

巨海東流は禪林の傑僧、機鋒甚だ辣、又た繪を善くし書は最も巧みなり、曾て井伊直弼侯の世子たりし時、相して劍難ありと說き、武人の劍難ある元より其の分なりといふに答へて、然り其の分なり、

唯だ公は死然を得ざらんと言ひ、一旦佛門に入らしめたるの人なり、後、此の寺を去りて世田谷の豪徳寺に入るといふ。

三　九鬼の千本杉

豐臣氏水軍の大將九鬼嘉隆が、鳥羽の海城に擁しゐたる艨艟の或ものは、日和山一帶の林より伐りて造りしものと傳へらる、日和山には今も九鬼の千本杉の一株といふが殘りて、賀多神社の神木となれり、社に東鄕大將の書きたる扁額あるは、九鬼氏が本邦近古の海軍の始祖なりといふに由りてなり、又た老楠樹多し、當時伐りて、絶海の樓船となしたりしなるべし。

九鬼氏の旗艦たりし日本丸の船首飾は、久しく此の地の造船所に在りて、風雨の打淋するに委せありしが、今や移されて宇治山田の徽古館に收めらる、長さは一丈ばかり、巍々たる大龍、雙角差牙として首を擧げ、左右に寶珠を拏して八方を睥睨するさまを彫りたり、塗るに丹碧をもつてして、多くは剝落したれど、長風一驅大濤に駕して、胡船を逐ふこと獺の魚に於けるがごとかりし雄觀を想はしむるなり。

四　大廟參拜

鳥羽に宿ること一夜、去りて先づ山田に向ひぬ、外宮の神苑、梅櫻一時に亂開せり、參拜の人甚だ多く、一隊又た一隊、翁媼相ひ伴ひ若きは老を扶く、中には蝶結びの紅き白きリボンを襟に佩びて團

體の徽號となすもあり、春社既に過ぎて郊疇事なく、麥はいまだ花さかず秧やいまだ抽かざるの農閑に乘じて來れるなるべし。

外宮より內宮に達する大道は、四十餘町に三十萬金を投じて造れりといふだけありて、廣逵砥の如く坦らにして、左右に花崗石の石渠を設けたるなれば、極めて壯大なり、翠阜斜めに起りて、上に兜形せる徽古館の屋根を現はす邊り、比類なき觀めなり、されど余は此の道を行かずして市廛の間の故の道を歩めり、唯ある骨董店の前に佇めば、何の木にやあらん、盤根錯節を削り夷らげて自然の卓子の樣にしたるがあり、其の正札に曰ふ『日本第一の品なり價一千圓』と、吹きも吹いたるもの哉と覺えず一嘆す。

五十鈴川に架け渡されたる宇治の大橋、檜の香は新霽の風に薫りて、橋の下、石走るまで水碧く雨に肥えたり、踏み渡るに勿體なき心地して、靜かに歩みを神苑の中に移し、神代ながらの御裳川の流れを掬びて嗽そゝぎ手を淨め、太廟の廣前の石に跪づきて額づき拜がむ、何かは知らず涙は自づと睫を沾ほしぬ、老杉の幾千章、太さ二抱へ三抱へ又た五抱へ六抱へなるが、何れも地上より十尋、二十尋の間は枝もなく眞直に、梢は雲漢を掃ふばかり、正しく神代ながらの物なり、崇遠高古、何に喩へて我が心の奥の眞を叙すべき、忝けなさに涙こぼるゝ、西行法師の歌は古往今來、わが國人の肺肝を披瀝したるなり。

五　二見の落日と日出

電車、二見に向ひ、黄昏に濱邊に近き旅館に宿す、折からの落日、海は是れ燕脂の海、雲は是れ猩紅の雲、殘照は磯の松林に入りて夜の來たること遲し、飯する前、友と共に興玉神社に賽す、潮はや盈てり、波來る時は白金の網を撒ずるに似、波去る時は眞砂の上に美しき藻草と介殼とを留む、友も余も兒を携さへたり、喜ぶこと甚し、波、人を逐ひ人また波を逐ふ、久うして還るを忘る、女夫岩を看るに及んで、兒等皆な訝かりて曰ふ、繪で見た方が立派なりと。

飯後また出でゝ濱の眞砂地を散歩す、星明りして松おぼろに潮白し、燈籠の下一人の老翁あり、雪のごとき眉を顰めて問うて曰ふ、水音が高う聞えます、餘程大きな河と見えますなと、翁はこの海を河と思へるなり、何處より來りしかと訊けば、飛驒の高山在三日町村の人、齡正に八十六と、伊勢の海を見て河なりといふ、天下に復た此のごとき大人あらんや、此の遐齡を得たる誠に宜なる哉。

今日山田にて逢ひし參拜團の一隊、余が室を隣りて宿りたりしが、中夜より皆な醒めて、喧すしく語り合ふ、蛙鳴蟬譟といはんよりは、鷄鳴狗吠と喩ふべし、終に眠られず、黎明ならざるに皆な起きて戸を推せば、缺月一片、低く波に垂れて、潮氣甚だ蓊勃、既にして東方漸く白く曙色將に動かんとす。

五時四十分、日は積水の天に連なるの間より出でたり、日の出、

日の出と歡呼して衣を更ためて走り出づ、日出づるの處は女夫岩より少しく南に當りて、雲紫に匂ひ初めしと見るうちに、旋で爛紅の色に變り、金箭の亂れ飛ぶがごとく、百道の光芒、高く天を射るかと看むる間もなく、日頭微かに潮より出でゝ、其の色は燕脂のごとく、一顧眄する間に、忽ち跳丸のごとく躍如として昇る、赤團々、見て眩せず、山海、煥然として晴色宇宙に充つ、余等覺えず掌を合せて拜したり、團體參拜の人々は、皆な六根清淨を唱へざるはなかりき、常世の重浪の寄する二見の清き渚に立ちて、朝彦を迎へたる此の時、此の際、實に世は遙かに人遠き思ひありき。

六　笠置山

月が瀬に梅を看むと思ひしが、花既に飄零したりと聞きしかば、笠置へと汽車に上る、幾たびか木津川の滸を往來して、車窓より南朝遺趾の豐碑を峯の頂に仰ぎ見れど、いまだ登る機會なかりしに、今日はしも其の宿昔の願を遂げんと喜び勇みぬ。

いつ見ても清く麗はしきは木津の川の看めなり、日は正に午、山村、水廓をちこちの雞、皆な啼くの時、笠置の驛に入りて驛前の茶店に手に持てる物など託し、大手橋を渡る折しも、杖つきたる老翁後より跟き來りて山の案内せんと勸む、寂しき町に入りて行くこと幾ばくもあらず、農家の背、竹林の間に逕ありて『自是笠置山』の石立てり、登り八町、路は急なり、靴窄くして指を痛めたる余は石

多き路に歩み艱めど、此の翁や甚だ躊躇にして兒等と後先を爭ふ、元弘元年八月二十九日、後醍醐の帝此の山に遷幸し、九月北條氏の圍を受けて、官軍嬰り守りし時、竹の皮を山路に布いて賊の登るを防ぎしと傳へられしも理りにて、急阪斷えて又た續く、施て一の木戸の趾を過ぐ、三河國の住人足助次郎重範が、木戸の上なる櫓より大音聲に名乘を揚げ、十善の君の在します城なれば、六波羅殿や御向ひあらんずらんと心得て、御儲けの爲に、大和鍛冶のきたえ打つたる鏃を少々用意仕つて候、一筋受けて御覽じ候へと、三人張りの弓に十三束三伏、箆かづきの上まで引きかけて、遙かに谷を隔てて進み來る荒尾九郎が鎧の旃檀の板を右の小脇まで箆深に射込みて馬より落し、弟の彌五郎代り進むを、胡籙より金磁頭を抽き出し、鼻油引いて、姑く鎧の高紐をはづし、十三束三伏、前よりも尙引きしぼりて、手答高くはたと射し矢は誤またず、五郎が兜の眞額を射碎いて、眉間の眞中をくつまきせめて、ぐさと射籠うだりと太平記に記されしは此處なり、南都の般若寺の本性房が、法衣の袖を引き結び、大磐石を手鞠のごとく投げつけて、勇戰したるも亦た此處なり。

名切石、殉難勇士の名を刻みし大石なりしが、震災に遭うて顚覆し、忠勇の名永く貞砥の懷にありて山に藏せらる、八町にして山始めて夷らに、鹿鷲山笠置寺あり、天武帝、尙皇子にて在ます頃、此の山に獵したまひし時、巨鹿の走り出でたるに馬驚き、四蹄相交へ

て十丈の石頭より跳り墮ち、帝一たびは氣を失ひて旋て蘇りたまひ、龍體何の障りもなかりしは偏へに佛の加護也と思召し、石上に佛像を彫りて群生を利せんと發願したまひ、後の標に蘭笠を石の上に置かせ玉ひしが、再び駕を此の山に向けたまひし時、御笠を置きし石の上より一羽の鷺飛び起ちたりと傳へらるに因みて、寺の名の起れるなりとぞ。

護法祠を過ぎて摩天の大石並び立てり、藥師石は高さ四十尺、幅は三十一尺、文珠石は高さ二十二尺、幅は十六尺、彌勒石は高さ實に五十二尺、幅は四十二尺と稱せらる、石の面に髣髴として佛像あり、昔は此の石を內に籠めて綠甍彩棟、いと大いなる伽藍建てられ

ありしを、元弘の兵火に燃え、石上の像相も亦た剝落したるものなりと案內の翁は說けり、實に大いなる石なる哉、仰ぎ觀て坐ろ氣魄の動くを覺ゆるなり、外に全剛胎藏兩界の石、一は高さ四十尺、他は高さ四十八尺なるがあり。

更に山に入りて石磴を登れば、元弘皇居の趾ありて石柵を繞らす、楠夢の處は此か、一拜して峯を下れば逕窮まりて彌勒石の頂に至る、俯瞰すれば遙かに護法堂の屋背を見る、曾て羽前の山寺に遊びて天狗巖を攀ぢ、顧みて脚下に五重塔の九輪の尖頭の、雲を穿つて巨戟のごとく立てるを見て、覺えず寒戰したりしが、彌勒石上、余は久しく居ること能はざりき。

七　浪華の花、京の花

奈良半日の游目は別に記すべきものなし、さりながら、猿澤の池の滸、柳碧に花紅なる間より興福寺の浮圖の高く湧き出でたる、何時看めても美しく、青草芊々として煙るがごとき嫩草山に、麋鹿の踽々として遊ぶさま、人をして長閑けき春の光に醉はしむ、春日の社、二月堂、三月堂、遊ぶ人群れ集ひて、綺春の繪を披くに似たり、始めて遊びたりし兒等の喜びは如何ばかりぞや、但し大佛殿に入りて金剛の大廬奢那佛を仰ぎ看て、想ひゐたりしよりは小さしと語り合ひたる、傘を披いて鼻の孔に入るべしなど、日頃人の說けるを聞きて、心に巨豐の魏容を描き居たるが爲めなるべし。

此の夜は大阪の友に邀へられて、新町の敎坊に浪華踊を觀たり、先づ茶席に入れば、春章、歌麿の錦繪より脫け出でたるかと訝からるゝ某の太夫の、烏雲の鬢に照り添ふ玳瑁簪、牡丹を綵繡したる襦襠さたるが、臺子風爐の前に端座して茶の手前いと優雅に、花簪したる丁髮の徐かに茶を捧げて進む、場に入れば衣香釵影充ち滿ちて、正に是れ歡喜の鄕なり、演舞は都て四閧、初めは北野の宮の櫻花、次に住吉千町田の靑嵐、杜若の花の里、次に木曾の寢覺の床の紅葉、終りは京の太秦の牛祭、鼓は左に絃は右に、居並びて雛のごとく、踊子は二十有八人、友染の振袖、綾の帶、翠袖飜り金扇揚り、翻々として舞ひ回る其の樣は、宛ら大いなる花の環の解けて

は又た圓かなるに異ならず、忽ちにして急絃疾鼓すれば、正に是れ飛花亂柳、一幅春風の繪を披展し來るなり。

翌日は京都に遊びて嵐山を看、更に鴨東隨處の春を訪ふ、花は未だし、獨り圓山公園の垂枝櫻の、開らいて七分なるあり、清水觀音に詣でゝ黃昏の京都を俯觀す。汗漫七日の遊び、更に鶯花を趁うて何の日か歸らんとするものぞ。（大正二年四月）

菜の花の國

旅行は秋に限る。春は身體が緊つてゐないので、旅行でもしてると、氣も心も酒にでも醉つてるやうにぐつたりして、秋の旅行程愉快ではない。

一體春と云ひ、春の旅行と云ふと、大抵は先づ櫻を聯想するが、私は元來櫻と云ふ物に趣味を感じない。櫻よりは寧ろ菜の花である、春に對する、斯う云ふ趣味から云つて、私が最近に於ける春の旅行中、最も愉快に感じたのは、一昨年頃だつたか奈良、京都地方へ旅行した時の事だ。

關西地方では、『菜花見』と云つて、丁度櫻狩りにでも行くやうに、菜の花の盛りには毛布なんぞを道端に敷いて、一面の菜の花を觀賞して悅ぶ風習がある位だから、彼の地方に如何に菜の花の多いかも略解るだらうと思ふ。

神武天皇の御陵――畝傍山を中心として、大和平野が到る處黃金色の菜の花に覆はれてゐる、其中を旅するのは、實に氣持の好い物である、靑く〳〵澄渡つた空、暖かい春の日を一杯に漂はせて、道行く人の眠を誘ふやうにオツトリと咲き揃うてゐる眞黃色な花野原。其中を、關西地方では誰でも差す處の例の日傘や、赤や鴇色やの蹴出がチラ〳〵隱見する。そして、此靑い空と、黃色い野の涯には、例の有名な天の香具山と耳成山と畝傍山とが、ピラミットのやうに立ち列んで、淺黃色に霞んでゐるのだ。

右を見ても菜の花、左を見ても菜の花、斯うした大和の春の旅行こそ、私にとつては實に懷かしい。茶屋の一室に旅の疲れを休めてゐる時、試みに前の障子を明けて見給へ、眼前に現るゝは唯菜の花である、其菜の花の咲く中の、其處には、古い傳說がある。美しい歷史がある。

世の中は何か常なる飛鳥川
　昨日の淵は今日の瀨となる

斯く咏はれた飛鳥川は、其菜の花の中をチヨロ〳〵と流れてゐる

のだ。

又た久米寺と云ふのがある。洗濯女の白いはぎを見て、通力を失つて下界へ落ちたと云ふ、おどけ仙人の久米仙人が此處に祭られてある。

ずつと先へ行つて、三輪と云ふ處には大神神社と云ふのがあるが、此處には斯う云ふ傳説がある――昔此里に一人の娘があつた。處が其娘の處へ、何時とはなしに一人の男が通うて來るやうになつた、男は夜毎夜毎に女の臥床へ忍んで來ては、曉早く歸つて行く。女は、何うかして男の素性や、男の歸つて行く行先を突き留めやうとするが、何うしても解らない。男は、何處からか來て、何處へか歸つて了ふのだ。處がある夜、女は男に氣取られぬやうに、男の着物の裾へ絲を縫ひつけて置いたが、朝になつて男が歸つて了つてから、其絲の引かれてあるのを便りに、其方へ行つて見たら、絲は窓の戸の穴を通り、吉野山を向うへ越して、今の大神神社の處へ來てゐた、男は三輪の神であつた。

後に近松の書いた戯曲の中に、お三輪と云ふ娘が、小田巻の絲を手繰り〳〵つて、鎌足公の跡を追うて行く事を書いた物があるが、そのヒントは斯傳説から得たものであると思ふ。

其他梅川忠兵衛が、四十兩の金を『使ひ果して二分殘る』と唄に謠はれてゐる其宿屋のある里も、其菜の花の中に殘つてゐるのだ。

歴史あり、傳説あり、戯曲ある菜の花の國、私は旅行地として斯うした土地を好むのである。

城の崎の三夜

一生野町

月の二十四日、日盛りの汽車に搭じて直路城の崎に嚮ふ、小川射山氏等來り送る、車は食堂に隣して魚香と酒芬と細々として人を吹く、江東先づ外交的の好辭令をもて厨僮を擒にし、人の覬り來れる一打の麥酒と一打の清涼水とを冷藏函に冷やさしめ、顔を背けて舌を吐く、笑謔の聲、室に滿つ、旅中の滑稽これより始まるなり。

曉は琵琶湖畔に搖ぎ、朝は京都の稲荷山の邊に來る、毎々京都に近づきて先づ一味の詩興を動かすものは、汽車の竹林のうちを穿ち

過るの時なり、千竿涼を啣んで颯として清籟を發す、東寺の浮圖を望むの時なり、霽色四に圍むのところ、碧琅玕のごとき塔上の九輪日に燦やきて、高く風煙の外に立つなり。

朝餐を須磨、舞子を過ぐる時に攝る、眼には看る盡も及ばぬ蒼波青松、心に思ふ史に殘る風流韵事、此の邊より眺むる淡路島の呼べは嚮ふるばかりに近くして、歌に詩に味はふ情趣には太く劣りて、翠鬟相依る縹渺の姿なきを、遊ぶ毎に憾みなりしが、今日は潮烟海を罩めて、此島山を有無のうちに藏したる、亦た尋常ならぬ景色なりき、姫路の白鷺城、粉壁日に嚮ひ又た日に背きて、陰晴兩つながら分るゝ天主閣を仰ぎ看つゝ元の播但鐵道に乘り換えたり、京都以西、驛毎に夾竹桃多し、尋常毎家に亦た此花を栽ゆるを見たり、姫路道中尤も多し、翠條紅花殊に困眼を呼び醒すを覺ゆ、高槻の驛に近く、ポプラの並木あるを見たるは、平板なる景物に一味の新趣を添へたり、友人弔花の棲遲するところなり、此木を栽ゆる、知らず渠の創企せしにはあらざるかを。

路はやがて山に入り、生野に近づけば溪山の趣頗る函根を渡るに似たり、五年前の一月三日、折からの雪ふる中を、桂月天隨蓍堂の三氏と共に此の山を度りし時の事を憶ふ、曾遊を共にしたる天蓍の二氏この一行中にあるは風流の宿因ありとや謂はむ、憾むらくは桂月の來らざりしを、十一時、生野町を過ぎて、代議士丸尾光春氏

の邸に入る、日は午なり、南風炎を扇る、禁ゆべからざる也。

二　城の崎

生野銀山の開坑は、遠く大同年間に創まれりと傳へられ、徳川氏の時、佐渡の金山と相對して採鑛太だ盛んなりしと聞きつれど、余は維新史を讀みて所謂生野銀山義舉に由りて此山を識れる耳なり、丸尾氏は此の地の名門、嚴君八十六の遐齡をもて尚ほ鑠鑠たり、當時南八郎等同志十七士と共に且つ戰ひ且つ走り、驛を過ぎて路の危厓に傍ふところを扼して死を決す、八郎緋威の鎧を擐き、髻を散じて白鉢卷をなし、長劍を環揮して挺身敵軍に斫つて入り、身に數丸を受けたれば、徐に路傍の石に踞し、草摺を襞み上げて腹一文字にかきさばき、反す刀の鋒尖に喉貫いて壯烈の死を遂げたりし當時の事を物語る、遺趾今に短碣を留めて驛の北に在り、憑弔の客の掬び手向くる苦清水、石の上に墮涙の痕を滲みなすとぞ。

井の華に沐あらひて襟を披き帶を緩うし、氷を嚙みて日午の深院に坐す、心始めて蘇するがごとし、旋て豪溪等の鑛山を看んと出て行くに促されて、行く〳〵市川の流れに沿ふて、三菱の鑛務所を訪ふ、岩を煎る熔爐の邊、紅灼し紫眩して爛れ流るゝ熔鑛の、泥のごとく又飴のごときを看めなば、渾身三斗の膏汗に衣や應に朽ちぬべけれと、余れ獨り途より回る、市廛隨處に、『他力貯金』の標札を懸けたるあり、其故を問へば、物を賣る代金の幾分を郵便切手にて其

顧客に呈し、切手臺帳に貼りて郵便貯金となさしむるなりといふ、亦一個の方便なり、他力の名、下し得て面白し。

午餐の饗を受けて後、汽車に上る、豐岡を過ぎて圓山川に沿ひ、玄武洞を彼岸の山腹に指顧しつゝ終に城の崎の驛に入る、東山、大師山、愛宕、甘露峰の堆翠峭綠、嵐光浮動して屏顏殊に明麗、爾來久濶と一拶して晒つて點頭するものゝ如し、前度二回の遊びや、雪深き冬の日と若葉薫る嫩夏の時なり、底事ぞ今復盛暑に遠く來る、何の未了緣かある。

三　溫泉の町

本谷川は溫泉の末を集めて、圓山の江に注ぐ、或夜ひそかに旅人の新妻が臙脂をや流すらめ、神代の昔荒神の劒を揮つて、山を劈きて島を造ると言ひ傳へたる津居山の迫門より、日本海の潮は江を傳へて此處まで通ふなり。

木欄干の短橋を度れば、溫泉の宿は千本格子の窓を並べて、二階三階窄き路を夾んで立てり、名物の麥稈細工、出石燒、繪葉書雜貨の廛を交えて、間ま淺葱暖簾を垂れ籠めたる二三の旗亭もありき、町に在る六の湯殿、大小の差異こそあれ、何れも檜の香の風に薫る破風作り、簷牙高く張りて輪奐の美をぞ盡したる、これを五年の前の遊びに見、又三年前の遊びに見て、全く其の舊觀を更めたるに驚嘆したり、紺に、紫に、蝶花を描き做せる繪日傘を翳しつゝ、湯具

を抱えて浴場に通ふ客を送迎する城の崎女、これも亦嬉くぞ思はれたる。

一行は旅館西村と三木屋とに分れて宿れり、余等數人は三木屋の東の別莊に入る、庭は甘露峰に面して頽嵐簷を拂ふ、一泓の池あり、鴨を養ふ、又二羽の青鷺あり、善く人に馴たり、館の僕、水鐵砲を執りて庭前の樹石に澆ぐ、風なきも亦自ら涼し。

導かれて一の湯に赴き浴す、大理石を甃して浴池としたる特等浴室、雅潔喜ぶべしといへども、余は尋常一樣の客の浴する大浴室の、深く且つ潤くして溫泉の町の一味の情趣の氤氳するを愛するなり、余は他の浴客の爲るに擬ねて、先づ槽邊に踞して檜杓を把り、幾たびも肩より澆ぎかけ、旋て徐に春の水のさゝ濁りせるに似たる溫泉のうちに身を浸せば、日に焦げ黝みし我が肌の、象牙とばかり白く透けたり。

四　田道間守

邈かなる古しの事は、今詳らに稽へがたけれど、大汝の命の出雲に榮へましゝ時、天の磐舟八重の潮路を越えて、新羅の王子天日槍が寶玉刀矛祭器を齎して此の國に來りし事は、史籍に載するところ也、其の幾代の孫田道間守が、垂仁の帝の勅を承けて非時の香果を海の外に求め行き、幾年を歷て齎し還りしに、帝既や崩れさせ玉ひしかば、御陵の廣前に哭して終に死したりしことも、亦其の果の橘

と共に青史の上に香ばしき事蹟にて、田道間守は但馬の名の起る因由、橘は但馬花の謂ひなりと傳へらる、日槍の裔葛城の高額姫、容姿殊に姝麗にましまして息氣長宿禰の妃となり、生れたまへる息氣長足媛は、實に神功皇后に在しませるなり、乃祖が新羅より出でし神功の、水師雷發、容易く彼の土を征したまひしは、當時日本海上舟檝の交通頻繁にして、大陸半島の情勢を知るに疎からず、以て策戰に資する多大なりしものありしならむを思ふ也。

余は溫泉に身を浸しつゝ、荒莽の世を憶ひ、更にまた此の溫泉の町の昔を想へり、脚を傷けし鶴の來り浴するを見て始めて甘露峰下に溫泉ありと知りたるは、今の鴻の湯其の蹟なりと傳へらる、天平年間、僧道智が曼陀羅を修して一湧泉を得たるは今の曼陀羅湯、龜山の皇后安嘉門院の來り浴したまひしは今の御所の湯、月卿雲客時に輿馬を枉げ、文墨方外の人亦鞋を解き杖を留む、吉田兼好は、この湯に浴びしての歸る途の雨に逢ひて『しほらしな山わけ衣春雨に雫も花に匂ふ袂は』の詠を殘し、頓阿法師は『わけて聞く麓の泉峰の蟬』の詠を留む。

恁く思ひつゞけて浴し罷んで、赤裸のまゝ籐榻に據りて窓前の涼を採る、湯女恭しく溫泉を玻璃杯に盛りて侑む、一味輕鹹、以て渴を治すべし、一杯更に一杯、帶を緩うして頂を露はして湯殿を出づれば、館の婢既に門に候し、例の繪日傘一半の陰を分らて相從ふ也。

五　竹野の濱

翌日は土用の丑の日なり、關東の人は中暑を攘ふの禁厭として鰻を食へど、但馬の人は、此の日家を擧りて海濱に遊び、潮を浴びて諸病を攘ふなり、此の日余等は竹野濱に遊べり。

竹野は城の崎を去ること汽車半時程なり、潮浴びの人絡繹たり、鷹野神社は式内の古社、天神祠後を過ぎて蟹舍蜃莊、遠く白沙の濱に連らなり、賀島山、高さ三百尺、中ごろまでは短草離蕪して烟らんとし、上には千年の古樹あつて海風に怒號す、高きに登りて騁望すれば、右は丹後の緑が崎の翠鬟を望み、左は香住の居組の長汀を看め、前は卽ち積水千里、襟を披らいて蚌宮貝闕より吹到する海風に當る、快言ふべからず、柴栗山、曾て此の地に遊んで其の大觀を記して曰ふ、『文化四年六月始めの十日、征夷府待問儒員讃岐の柴邦彥彥輔、播磨の高見恭、本州の醫生黑崎擇等と同く來り遊ぶ、左右に隱岐佐渡及び三越を肘腋に睨し、滿洲女直を雲天の外に望む、酒を把つて浩然曠世の懷ひあり、門人三上順憲及び兒允舛從ふ』と、斯の文石に勒せられて今や山の蔭に在り、北陸佐渡を袂に蔭に看むるなどは、此雄渾なる北海の大觀を耽稱せる文人の誇張なれど、快晴の日は隱岐が島を水天彷彿の際に望み見るべしと、興謝の海、韓國かけて晴るゝ夜は、月の中なる隱岐の島山。

余も人も皆海に入りて、折柄地引網せる漁夫の群に交りて網を引

く、やがて網し得たる魚を宰して、賀島の旗亭に午餐したゝむ、午餐の後は尤字大字人さま〳〵の晝寢の中に座して、余は乞はるゝまに、幾柄の白扇に、塗鴉ノ〳〵の字を書き散らしたり。

六　但馬の海

海の涯、凝紅半規の落日を啣んで、折からの鰯雲をもさゞれ波を、も、閻浮檀金の色に染成したり、衆皆辨天島の畔に艤せる舟に乘て、柔艪徐に加島の蔭を過ぐ、百尺の危崖、松肥え石瘦せ、落々として空外に懸り、沓潮其脚を洗ふて寂寞として回る、此の日豫め石油發機船を儎ひ、動竹野の沖より舟を曳かせて小車の瀧を海上より看め、津居山の港より圓山川を遡りて、城の崎に歸らんと定めたりしが、余等の舟賀島の陰を離れて沖遠く漕ぎ出でたれど、約せし時を愆まりけむ船いまだ來らず、夜色四もに圍みて海氣荒莽たるうちに、猫崎の名に呼べる賀島山の、巨猫の睡るさまにして黑沈々の影を波間に横ふる邊、牙より白き三日の月懸りたり。

曳船の來ずとも何かあらむ、宵月の海に浮びて、飽まで闌干なる夜色を領略せんと勇み立ち、舟子を勵まして沖へ〳〵と漕ぎ出せば、遙波の漆よりも黑き邊、迷燐の燃ゆるがごとく青白き火の三點五點、見る〳〵うちに數を增して水や空なる其の間に燦やき渡れり、是れ夜漁の舟がアセチリンを燃やして魚を集むる火なり、衆皆奇として これを看む、詩を吟ずるものあり、謠を歌ふものあり、舟を擧げて

譁然たり。

旋て石油發動機船は一隻の小舟を曳いて來れり、皆乘り移りぬ、推し分け進む波の跡を微白に引いて御待山の沖を過ぎ、九時に津居山の港に入る、曾て遊びし時、潯陽の江の口に似たらむかと想ひし此港の、今は黑山黑水何の見るところなし、唯だ潮音を聞くのみ、偶〳〵人あり、岸に立ち燈を舞して連りに舟を喚ぶ、港の人、豫螺の壺燒を作りて、余等に饗まはんとしたるなりき、歸館の時に遲るゝの故をもて、舟を停めずして去る。

月は落ちたり、空の星屑圓山川の江を罩めて、夜闌の風色轉た幽寥、滿袗の風露、秋に似て冷やかなるを覺ゆる也。

七　應擧寺

磴前の清渠、水駛うして鮑の行くこと多く、門內の老楠、夏深うして蟬の啼くこと頻り也、竹野濱の遊びありし翌、余、諸友と共に香住驛を下り、所謂應擧寺なる龜居山大乘寺に詣る、三年前の初夏、山陰線開通式の鳥取市に擧げられし時、轉轍夫過つて來賓を載せたる客車を脫線せしめ、偶爾此の驛に停りて、守屋鴈峯、柵瀨碧泉、關田朱溪諸氏と共に、此寺に詣りて巨匠の世に留めたる丹精を耽看したりしことを憶ひ起せり。

木蘭色の法衣つけたる老和南、一山の衆僧と共に余等を迎へて、山水の間に隣れる淨室に茶禮を行る、日は午に近うして深院幽靜、

風なけれども亦自から清涼、導かれて先づ山水の間を看る、室を繞る金襖子、一面に揮拂せる瀟湘の圖、曩年一僧あり、夕に宿を乞ひて曉に去る、去る時竊に襖子を截り剝がして方尺處々の金箔を盜み行けり、物色して取り還し、故の如くに補綴したれど、山阿水隈、尙ほ缺損するところありしを、川端玉章之を補修して僅に舊觀を存することを得たりと、同じく金襖子八枚に描きたる郭子儀兒孫と戲るゝ圖なる所謂芭蕉の間のものと共に、今は國寶に錄せらる。

金襖子八枚に描きたる水墨の松と孔雀、墨竹、瀧の間の龍門の鯉と遊鯉、正廳の床に左右龍虎、中に王義之を描けるもの、皆應舉の筆なり、應瑞繪くところ鯉の間、吳春繪くところ農耕圖、蜀山の圖、源綺の鴨、蘆雪の群猿、守禮の狗子、群妙人をして看て心醉せしむ、殊に建長寺藏する吳道士の原圖を應擧の臨摹すと傳ふる十六羅漢、精采奕々として人に迫るを覺ゆ。

鷺張の長廊下、徐に渡れば鷺の小々啼きして、寺後の青嶂、間毎間毎の青嵐、人は此の巨匠が世に留めたる墨の香に醉ひ、啞とばかり默して且つ看め且つ步むなりき。

八　矢田川の鮎狩

狩野家、天下の繪所の長者として一世に雄張しゐたるの時、夙に南畫を研究して南北兩派を統合し、華を摘み英を含みて以て當時の繪乾坤に丸山派なる一流を創始したる斯の巨匠の繪に對すれば、更

に又た信義篤敬、其の人格の尊ぶべきを憶ふなり、其の微にして未だ顯はれず、簞食屢匱しきの時、大乘寺の和尚憐れみて遊學の資を與へたるを德とし、業成りし後、京都の宅に舞馬の災ありし時、一門の弟子を率ゐて此の寺に來り、淹留して日に丹青に親しみ、群妙を此に留めて宿昔の恩に酬いたる、誠に欽すべき也。

寺を出でゝ行く〳〵矢田川に沿ふて下り、鮎を漁するを觀たり、日盛りの石磧、縹碧の水其の間に迂餘して流るゝことゝと駛し、漁夫二人、柳の枝を絢ひ結びて長き注連のごとくに作れる兩端を持ちて、流れを趁ふて下れば、鮎や、水中に閃白せる柳の葉を見て驚き怖れ、跳つて水を出るを、扇を半ば啓きし形せる手網を持てる漁夫數人、咄嗟に魚を波上に掬ふなり。

余等は衣を揭げて清淺を渉り、更に船して行く〳〵、打魚を觀、河原撫子憐れに咲き亂れたる石の上に閑鑪して、網し得たる香魚を炙りて小酌す、『鮎は什麼したつて此の川の物に限ります』と、村長誇り顏に著に挾むで頭より食ふ、『鮎は此川に限る』の言葉は、天下隨處の鮎の產地に聞くところなり、鄕土の矜を此の魚に寄せて言ふなり、余は別段此の川の鮎の、相摸川のよりも桂川のよりも、乃至長良川紀の川のよりも旨しとは思はざれど、四圍の風趣と村の人の欵待とは、余をして獺のごとく此の魚を飽喫せしめたりき。

舟の之くところを縱にして川を下る、碧灣前に濶けて遙に漁莊

の綺錯するを見たり、青嶂の海に立つものは岡見公園、風煙繪くに似たり、船は旋て淡鹹相分るゝ處に至る、江を吸ふの濤、高きこと丘のごとし。

九　岡見の入江

折から上潮は高鳴りして滿江の水を呑む、藍を漲らせたる駛き流れは、紺を凝らせる潮の唯中を貫いて行くなり、相撞き相搏つて波は空を蹴つて驚き立つ、此の邊の水路を知らぬ舟中の人は、疾く疾く舟を岸に寄せよと呼ぶなりき。

余等と共に舟に在りし臺灣バナマ黄帷子の衣つけたる村長は、髭むくつけの唇に喇へし鉈豆煙管を拷ぎ取つて、馬の如き齒を露はし、諸君心を安んじ玉へ、俺諸君と共に茲に在り、彼の大浪を乘り切つて、日頃の技倆を御覽に入れ申すべしといふ、蠻勇誠に愛すべし、斯くいふ間に、舟は流れを趁ふて下れり、川の海に注ぐところ、砂嘴長く延いて横さまに平坡を作る、流れは平坡に遇ふて迂曲して海に入る、頂白き大波其の沙の坡を決して、韃靼と頽れ來りて舟を呑まんとす、余等は掌に淋漓の汗を握れり。

遣時、村長肌押し脱ぎて胸に蒙茸の猪の毛を戰がせ、打てば精鐵の響き牙ゆらむ肉瘤隆々の腕を伸べて、年若き舟子の手より艪を奪ひ、艪臍に潮を吳るゝも疾く取り伸べて、面を振らず漕ぎ出す、舟は箭とばかり流れを下れり、咄嗟と見る間に、大波搭と頽れ來りて、

潮の花は雹と飛び雨と荒れたり、颯と退く波の肚を、吾が舟は七首のごとく貫いて過ぎたり、蠻勇村長、艪柄を敲き面を仰いで朗かに笑ふなりき。

搖られ〳〵て行くほどに、旋て穩波恬熙の入江に浮べり、正に岡見山の麓、漁蜑の村はたゞ晝靜かなり、晒らせる天草の香り高き磯邊に舟を捨てて、余は岡見の山に登る。

一〇　岡見公園と玄武洞

岡見公園、これを彼の竹野の賀島に較ぶれば、騁望の雄大と境致の幽邃とは迢かに其の上に超えたるを思ふなり、百尺の蒼巖、海を拔いて欹だつさまの瑰奇なるは、先づ人の氣魄を動かすに足るものあり、蟹雨蜑風、知られざる年の間を淋打されたる巖の容、石の色は言ふも更なり、魚龍常に驕れる日本海の大濤長驅して、山の脚なる亂礁に不斷の雪を飜す看めの豪壯なる、山の姿、海のさま、正しく蓬萊の圖を披き觀るの心地するなり、這回の山陰道中、岡見の山ほど余に縹渺の詩懷を寄與したる看めはあらず、雪霽れし時の看めは什麼に、月圓かなる夜の望みは如何、うら〳〵と遠霞して、松の花散る徂く春の興はそも、余は山上の茶亭に憩ひて、村人が壺漿の情眞に接しつゝ、恍然として想ひをいまだ看ざるの景致に馳せたり。

日は西に傾きたり、狼籍たる松の影は苔の面を陰らせて、繪きなす虬龍の圖、草履の裏に滲む露冷々と心地よし、余は袂を叩いて强

ひて留むる村人に辭謝して此の山を下れり、下りつゝ又幾たびか顧望したり、やがて斜日の村、燕しきりに飛び交ふ中を疾歩して、僅かに香住の驛に入り、折からの汽車に搭ずることを得たり。

翌日、朝は溫泉寺に春日佛師の作と稱する國寶十一面觀音に參詣し、更に汽車玄武洞驛に下り、青蘆の汀より舟に乘りて圓山の江を渡り、所謂玄武洞を觀たり、洞の前の地を夷して一區の庭を開き、瀟洒なる旅館と茶亭と相隣りて設けられたるなど、曾遊の時と甚だ異なれり、玄武洞南の山腹、別に一洞を開き、洞下に水を湛えて板橋を架し、池中に小祠を置けるなど、これも四年前にはあらざりしところなり、名づけて青龍洞といふ、誰が名づけしや、玄武は六稜の石の龜に似たるに擬せるの名、方位の四神の謂ひにはあらず、青龍の名は當らざるなり、宜しく選んで小玄武洞といふべき也、小玄武洞の看め、蒼古の趣きを缺けれど亦面白し。

舞鶴と天橋

一　朝の舞鶴

洞前の旗亭に午餐したゝむ、膳に海素麪といふものあり、海藻なり、色は濃碧、細條相ひ絡ふて素麺に似たれば斯く名づけゝむ、三杯酢にして食ふ、脆美喜ぶべし、以て酒を下すに堪へたり、微酔は旋て睡意を催して風前に肱を曲ぐること半晌ばかり、我が嚔に夢驚き回る、偶人の字を乞ふあるに口占一句、

大岩の懐寒き晝寝哉

と書し與ふ、半江の斜日、半江の青蘆、柔櫓徐に滿江の陰晴を截斷

して再び玄武洞驛下の汀に到り、復城の崎に還り、東山公園に登りて樂々浦、浮辨天、桃島、日和山、四邊の風光を領略して歸る。

晩間、ゆとう屋西村氏の邀宴に其館に至り、沾酔して歸りて行李を理む、明くるに易き短夜の午前二時、余等は此の愛すべき城の崎を去つて舞鶴に嚮はんとす、滿天の風露、秋を隣の星冴えたり、醒後の情味、誰か客愁の冷やかなるを覺えざらむ。

朝七時、短夜の殘夢を載せたる吾汽車は舞鶴停車場に入る、町長並びに町の縉紳、余等を迎へて旅館清和樓に入る、朝風呂に夜來の煤塵を浣いで困眼始めて明かに、氷菓子に前夕の餘酲を解いて心身始めて蘇するがごとし、旋て又車を聯ねて朝代なる自由樓の邀宴に

赴く、舞鶴山の積翠と映帶して、花陌柳巷相望む、自由樓は富田屋と共に此の地の旗亭の雄と稱せらる、風薫る樓上の大廣間に菊、ダリヤ、花いろ〳〵の飾氷を陳ね置いて朝の宴は開かれたり、歌吹一曲、廓朝代の乙女等が飜へす袂の美しさ舞鶴踊を看る、飾氷は痩せ去れど興は盡さず。

『宴酣、飾氷の夏を痩す』

二　細川幽齋と田邊城

舞鶴、何等の佳名ぞや、玄裳縞衣翩翩として九皐の上に舞ふ仙禽の清姿を想ふなり、此地元は田邊と稱したりしを、城の名の舞鶴といふをもて今の名に更めたる也、驛に近き一堆の翠丘は、田邊城の址にして、中に心種園あり、慶長五年の秋、城主細川忠興濃州に出で戰ひ、父幽齋此の城に留守して敵將小野木重勝の圍みを受く、幽齋歌道に精通し、殊に古今集の秘訣を承傳したりしかば、後陽成帝其の世に亡びんことを軫念し、烏丸光慶を遣はして和議を諭さしめ、且つ古今の傳授を命ぜさせたまふ、攻圍の軍勅命背きがたく、圍みを解いて藤岡に屯ろし、幽齋は勅使を城中に迎へ、謹んで古今の秘訣を講ず、重勝の軍、藤岡の山より石弩を放つて簷外の老松に中る、正に幽齋の坐を距ること咫尺なりき、されど神色常に異らず、從容として講義を終れりとの佳話今に傳はれり、心種園中に『古今傳授の松』といふあるは、則ち幽齋が跪いて古今の傳書を藏めたる寶函

を勅使に擎げたる處なりと云ふ、鬱乎たる晩翠、永く此の佳躅を護り、籟聲は不斷の笙歌を發するなり、幽齋は實に舞鶴の開拓者なり、舞鶴の人には、此の木は當に甘棠なるべし。

日盛りの町に車を驅りて、新舞鶴の埠頭に至る、水上警察の汽船壬寅丸は、余等を載せて行く〳〵風光に看、與謝の海を渡りて宮津に送らんとして俟てるなり、町を貫く高野川、青銅の擬寶珠、檜の欄干、舞鶴乙女が繪日傘さして來往する大橋の上に少留して、余は田邊の昔を憶ふ。

三　舞鶴の入江

夏霞、四に青嶂を繞らして、中に紺碧なす海を包む、螺鈿の寶奩を開いて淨玻璃の鏡を見るに喩ふべきか、是れ海ながら海とは覺えず、正に大湖の看をなすなり、實にや慈母の懷のごとき此の港には子來の船の帆影を斷たず、延喜式内の崇社あり和銅以前の古寺あり、殊には元伊勢の靈域も遠からず、昔より北の海の要津たりしと思ふべく、近くは此の港の東澳に軍港置かれて、元帥東郷氏其の最初の鎮守府司令長官たりし以來は、正に日本海第一の海關となれり、而も舞鶴の人士は、更に此の港の西澳をもつて北韓及び浦鹽に對する輸出港たらしめんとし、埠頭の築造、舟車の聯絡、其の設備を完うするに努力せり、斯の希望の達せられたる曉は、町の殷賑は當に今日に倍蓰するなるべし。

棧橋に横づけされたる壬寅丸に余等は乗れり、汽笛は獅子吼一聲して船纜を解けり、舞鶴の市の臺榭、市外の山の寺觀、瓦甍粉壁の綺錯せるが、看す〳〵風煙の外に落ちて、左右の青山相迎送す、東の方、群巒を壓して双鬟髻を露はすものは青葉山、一に馬耳山の名あり、西の方亂山を拔いて峰容殊に秀麗なるものは武部山、丹後富士とは是れなり、落霞、山を彩り、浮鷗、沙に描く、歸帆や、青嵐や、舟を繞つて九景の勝あり、野田笛浦の選ぶところなり。

翠螺相依るの陰より遙に軍港を望み見て、舟は海門を出でゝ與謝の海に浮べり、朝代の朝の宴の醉いまだ醒めやらず、天幕の陰に箕踞しつゝ、千里の海の脊を撫でゝ來る潮風に吹かれては、余も人も坐ろ睡を催して、唯だ恍惚としてある折しも、天橋よ天橋よと誰が呼ぶ聲に驚き覺れば、久濶らしや十あまり三四年前に相見たりし天橋は、舷頭咫尺の前に横はれり。

四　天の橋立

碧なす波の上に、萬松翠を攢めて浮かぶこと一文字、海風これに吹き入りて青うして雨ふらんとし、潮ば倒影を皺まして碧は暈し翠は滲し、霧よりも淡く靄よりも濃き一氣の紫氤氳を搖曳するなり。

余等は小艇を卸して橋立明神社に近き磯に上り、亂松の蔭なる茶亭に入れり、祠を繞つて、松殊に多く、日光重綠の間より洩れ來りて、松釵、滿地の軟沙の上に無數の青錢を撒ずるなり、所謂濃松と

は此の邊を云ふなりとぞ、海水浴を試むること半晌ばかり、『都なりせば君も汲み見む』と和泉式部の題詠を留めたる磯清水を沸したる風呂に入り、浴罷んで犢鼻褌一貫、屋を繞つて松籟さながら笙歌のごとき中に座す、詩境又た畫境。

愛を割いて壬寅丸に歸り、直に宮津の埠頭に上る、町の縉紳先づ余等を導きて瀧上遊園に至る、如願寺後の山なり、寛永年間、宮津城主京極高廣、酷だ此の山を愛して燕息の地となし、山を鑿り石を甃み、泉を導いて瀑布を作り、名づけて瀧上山といふ、其の後延寶年中、時の大守永井信州、一館を山上に作りて漱玉亭と號し、爾後阿部、奥平、青山、松平の諸侯皆な此の山を遊息の所として庶民の妄りに入るを禁ぜしを、維新後公開、今は遊園地となれるなりと、山には老松多く又た櫻楓多し、一峰復た一巒、樹を穿ち石に傍ふて路や迷はず、巔を極めて茶亭の竹欄干に凭れば、宮津全市は脚下に在り、與謝の海又た阿漕の海、天橋其の間に浮んで晴嵐を拖くなり、雨至る、豪溪、天隨を促して疾歩して山を下る。

五　宮津の盆踊

町中の肱かさ雨、人の軒に佇まむは關東男兒の意氣を損ず、豪溪も天隨も余も悠々と雨の中を歩みつゝ、一行の今宵の宿の何處かを豫め訊ねをかざりしを悔いながら、流石に路行く人に『俺等が宿屋は那邊でござる』と問ふを羞ぢ、海に傍ふて一路小天橋の松青さ

虎が鼻に至り、舟を僦ひ蓬を撤ねて雨中に露座し、棹歌杳然とし興謝の海に浮ぶ。

小天橋は續く大天橋、その時雨やうやく疎にして絲をなさず、波少しく起ちて、海は綃を織り、天橋の松、翠いよ〳〵濃やかに、風煙これを澹粧して美景人に媚び、宮津の町を望めば、參差の臺榭依稀として雨外にありて宛がら蜃樓の觀を作すなり、偶見れば虹わりて遙に成相山の巔より起り、徂徠の雲を貫き搖曳の靄を穿ち、七彩鮮かに渡りて與謝の海に入る、余も友も唯だ虹よ虹よと呼び指さしつゝ、終に此の大觀を嘆美するの辭を忘れたり。

柔櫓徐に雨を貫き虹を穿つて宮津埠頭に近づけば、海に枕める三層樓の簷の青簾を高く捲いて、欄干に人の影の簇がるを見て、始めて今宵の旅館は彼の樓ぞと知る、庭前の渚に舟を寄せ、山嘉樓に入る。

此の夕、宮津の縉紳は、余等一行を水濱の屋外宴會場に邀へて盛筵を張りたり、大天幕の中央に、電燈を利用して五色の噴水池を設け、池を匝づて食卓を安排し、花を飾り燈を聯ねて設備甚だ佳麗、宴闌はにして宮津美人數十名、太鼓、笛、三絃につれて驚次鴈行、噴水池を匝りて所謂『宮津盆踊』を舞ふ、舞の手振りを加味したる舞態や婉雅、歌謠や優美なり、脆絲の音哀竹の聲、悠暢なる太鼓につれて袞々として環舞し、やがて急絃疾鼓と共に人は飛花亂柳のごと

し、余や看て恍惚、坐ろ心は胡蝶となつて、共に春風の舞はんとするなり、余は終に斯の一宵を忘るゝ能はざる也。

翌早、余は豪溪、江東、天隨、唯一諸氏と共に同遊諸氏に別れて舞鶴に歸り、直に汽車に上りて龜岡を過ぎ、保津川を下りて嵯峨に入り、京都四條の唯ある旗亭に午飯して、更に桃山御陵に詣り、夜八時、急行列車に上る、車中端りなく曾て山陰の遊びを共にしたる親友棚瀨碧泉に邂逅す、亦奇緣と謂ふべき也。（大正三年七月）

松島と金華山

一　衆美松洲に歸す

宮城縣の人士、名勝松島を經營して世界的大公園となし、幽光を中外に發揚せんと企て、其の第一期の設備略成りたるの故をもて、月の二十三日より三日に亙りて盛大なる紀念會を擧行したり。

竊に思ふ、松島の名の人に知られたるは、遠く千年の昔に在りしなるべし、鹽土の老翁、建御雷、經津主の神軍を邀へて王化を此に布きたる荒鴻の世は知るに由なけれど、將軍東人、田村麿の遠く蝦夷を邊境に攘ひし時、行基、勝道、德一等の諸高僧が錫を飛ばして夷

民教化に努めたりし時、旋て松島の名は京洛に傳はりしならん、是より後、任に邊城に赴くの武人、罪に謫地に貶せられし縉紳の、來往茲に緬懷を舒べたるなるべし、天の橋立、嚴島と併稱して日本三景と呼ばれたるは、抑も何の世なりしかは詳らかならざれど、天の橋立の歌人の詞藻に上り初めしの時は、松島も亦た已に業に其名を知られたるなるべし、實に七里に亙れる長汀曲浦は六方里の碧灣を懷いて、中に大小二百四十九箇の青螺を浮べたる、其の規模の廣大に過ぎて、群妙を攄攬する能はざるの嫌ひこそあれ、多聞山、大鷹森、富山、扇谷の四大觀は、方錢仙臺通寶の其れのごとく、四個の中心となりて各衆美を一騁望のうちに領略することを得べく、南山和尚の『天下山水あり、各一方の美を擅にす、衆美松洲に歸して、天下に山水なし』と歌ひたるは、溢美の品題にはあらざるべし。

宮城縣の人士、今この松島を經營して世界的公園たらしめんとす、前代知事の貽策に由りて、時の知事森正隆氏鋭意して其の大成を期せんとするあり、余は此の松島の經營の、實に宮城縣の開發に多大の貢獻するところあるべきを想ひ、又た豪快にして果斷なる斯の良二千石が、必ず其の抱負を成就すべきを想ふ。

月の三十一日、夜、車に行李を載せて上野に向ふ、車前雨細うして未だ簾を成さず。

雨にして又た秋にして、精養軒に催ほされたる祖道の宴や、殊に征懐の濃やかなるを覺ゆるなり、玻璃窓外の雨烟りて水よりも冷やかなる夜涼の中の團欒は、舊識といはず新知といはず、欵洽の情を盡して更の移るを覺えざりき、十時、庭を隣れる鐘楼の鐘は、余等を促して手に把りし紅茶の碗を措かしめたり、車を喚びて皆乘る、余は綺堂君と時雨るゝ鐘の一聲々裡に歩して、灯昏き清水堂下を行く、酒醒めて詩や愁ひんとす。

土浦にして子夜、原の町にして天明、人は京の殘醉と海道の斷夢とを帶びて、薄陰りの朝の仙臺に入れば、青葉の山の翠黛は故人のごとく迎へたり、森知事、縣の高等官、市の縉紳諸氏の迎接を受けて直に車に上り、旅館に分宿す、東北大學の始業式と、松島經營紀念會第一日とに當れるが爲めに、市廛甚だ賑しゝ。

朝八時半、先づ宮城縣廳に訪ふて知事官房に茶菓の饗を受け、更に庭内の孔子堂を觀る、縣廳は元の藩學養賢堂の故館にして、文化年間時の鴻儒大槻民治先生の建策に由りて立つるところ、實に泮宮の古制に則とりしものといふ、規模まことに宏壯、曾て藩侯の儒臣の講書を聽きしところの室のごときは、楣に六十四卦を掛し、正面に重村侯の書、養賢堂の額を掲ぐ、人をして坐ろ恭敬の念を起さしむ、此の室、前代知事の時までは、襖子を撤し疊を去り、紙を貼り壁を塗りて洋風に模擬したりしを、今の森知事の來るに及びて、一

切之を掃ひ除き、早や既に散佚して之くところを知らざりし襖子欄子を物色し來りて、以て舊時の觀に復したるものといふ、現に正面上段の間に在る東洋の繪きたる孔雀の襖子のごときも、二雙のうち僅かに一雙を民家より索め得、他の一半は白地の襖子をもて之を補へり。

竹樹清新、別に一區の淨地を劃せる孔子堂及び大成門も、亦た皆な尋常一樣の民家に在りしものを、移し建てゝ補修を加へたるものと聞く、百年絃誦の庭をもつて公衙とせるは、他の府縣に於いて觀る能はざるところなり。

三　青葉城

松楓蕭疎、一區の淨地を護れる孔子廟邊に步趨して、微風に戰ぐ竹樹の音を絃誦の聲と聞き做しつゝ、徐に大成門を出で、墻を隣れる縣の物產陳列館に入り、巡覽すること少時して更に西の方青葉城址を指して車を走らす。

廣瀨川を度れば、樓門高く翠阜に倚つて立つ、門は元豐太閤名護屋の牙營のものなりしを藩祖正宗に賜ひ、正宗これを玆に移して青葉城の大手門とせるなりと傳ふ、欅の古柱、如輪目の厚扉、雨は彫り霜は刻みて木理凸起し、敲けば金石の響きあり、梁に飾れる五三の桐と菊との紋章は、黃金の色に燦やき、屋上の鴟尾高く青冥に挿す、氣象誠に廣大、獨眼龍の雄圖を觀るべし。

第二師團長の副官、慇懃に余等を司令部の樓上に延き、露臺の邊に立ちて四方の形勢を指示す、近く萬甍の市衢を瞰、遠く郊外の風煙を見る、正に是れ奥羽五十四郡の大守の盛宅とするに足る、看て坐ろに膽に毛を生ずるを疑ふなり。

時の迫れるをもて愛を割いて司令部を出で、十時半、東北大學の始業式に列す、式場は校庭の中の大幄舍に在り、綠葉と彩花とを集めて門を作り、簡素にして清楚なり、總長北條時敬氏の式辭、言々風霜を帶びて人の脾肝を刺すの概あり、其の結末の一句、最高學府たるの天職を曠うするの時んば、國家は斷じて之れを宥さゞるなりといふに至りて、舌頭燃えんとす。

式後余等一行は市中の名所を巡覽するものと、郊外の舊蹟を討尋するものとの二隊に分れ、余等は自働車を驅りて先づ七北田村の洞雲寺を觀に行く、所謂山の寺なり、慶雲年間定惠和尚の創立するところ、山を蓮葉といひ寺を圓通と呼びたりしが、其の後慈覺大師再興の首祖となり、更に久しく年所を歷て荒頽せしを、後小松帝の應永七年、梅國禪師來り領主國分氏の寄捨を得七堂伽藍を作ると傳ふ。

四　洞雲寺

前の車の蹴り立つる風沙は滾々として後の車に乘る人の衣帽を撲つなり、幾條の轍の痕は奔る巨蟒の殘し行く跡を蜒らせ、梅田川の橋より丘を踰えて乾馬燒の窯元と聞ける靜けき村を過ぎり去る、犬

は吠え鷄は啼き、窓の邊に軒の蔭に驚目して迎へ送る村人の顏簇がれり、平生自働車を惡める余等ながら、忙しき日程のちうに采風の興を貪り取らんと思へばこそ乘るにてあるなれ、余は車上縞に蕭散なる村巷の平和を擾したることを謝するなりき。

奥州街道の並木の陰を走ること一里ばかり、蓮の葉を覆せたる形の丘幾個か重ぬる其の陰より一路斜に入れば、茂林淨境を開いて茅葺の寺門あり、門に扁せる『不老峰』は栓菩和尙の書するところ、和尙は實に明峰梅國の遺蹟を繼いで此の洞雲禪寺を重興したるの人なり、學德竝び高く尤も書道に通じ、字を作りて穆茂高閑の趣あり、門を入りて數十歩にして樓門、遮那殿の額あり、樓門より直に開山堂に通じ、間に長廊あり人は階を拾ふて行くなり、其の制甚だ奇古、殊に樓門の楣及び四方の扉に彫刻せられたる龍鳳、花木、仙佛は、幾つの昔の雨に淋がれ霜に打たれて、粉彩全く零落したれど、左甚五郎の作と傳はれる其匠の鑿の香と刀の薫りを明々と今に傳へて、人をして終日こゝに立ち盡して耽看歸るを忘れしむるなり、開山堂左右の楣にも亦一木をもて彫り成したる双龍あり、如意を揮つて喚び起せば、驀地に雲を興して飛動せんかと訝からる、唯だ惜むらくは近ごろ之に粉彩を施して、元の蒼古の妙色を失ひたり、庭に懸けたる藤原秀衡時代の梵鐘も亦新に研かれて爛斑の鏽華を洗ひ去れり、札して『一里〳〵の鐘』といふ、藤原氏の時、白河關外の

驛毎に懸けて、打つて上國の警を傳へしものといふ、爾く俗僧の爲めに古色を拭ひ去られたれど、古音全く銷せず、試みに之を搗けば、清韵嬝々として猶ほ八百年の聲を作すなり。

寺を出でゝ竹樹の間を行き、捻華山實相寺に赤穗義士寺坂吉右衞門信行氏の墓に詣る、寺坂氏復仇の後、髮を剃りて理海慈寶と號し、諸國を行脚したる後やがて此の邊に草の庵を結び、銅佛を鑄り同志の姓名を彫りて其冥福を祈りをりしが、寛保二年五月終に寂したり、村人其遺せる筐を檢して、大石氏等諸同志と往復したる書牘數通を得て、殆めて寺坂氏なることを知り、其墓に標すといふ。

五　支倉六右衞門の墳

白苔繡ぬふごとく墓石を封じて字を讀み難し、墓に傍ふて宮下信敬の選べる理海法師の記碣あり、滿地の松釵、蟻あり隊を作し、蠭蠭の屍を擁して行くなり。

村人は旋て余等を導きて村の豪戸本郷金治氏の莊に導き、飼養の馬を觀せしめたり、先帝の愛御したまひし禁厩第一の駿金華山は、實に此の家の出なりといふ、余等の觀たるは栗毛、騂、都て五頭、姿態高逸、馬を相する術を知らざる余等ながら、天晴龍種を傳へたる良馬とこそは想はれたれ、中庭に卓を並べ、細君、娘子、婢僕を擧げて周旋し、梨子を劈き、麥酒を濺ぎ、里芋しめぢ茸の椀を侑む、瓶には露を和して折り來れる野花を亂挿せり、野趣横溢し皆な甚だ

歎べり、娘子曰ふ、邊鄙の里、貴客に供すべきものなし、せめては畠の芋と山の茸をも參らせんとてと、此の穆茂なる家風ありて、舊家の儼として永く榮ゆる所以を知れり。

本郷氏の莊を辭して車を回し、光明寺に支倉六右衞門の墳に詣る、老雄政宗の命を啣んで遠く羅馬に使ひし、我が外交史冊の上に燦爛たる彩光を放てる人の豪骨を横たうるの處としては、唯だ僅かに碌缺せる小さき五輪塔あるのみ、亦太だ可也、縱へ墓畔に立てる大槻博士選するところ六右衞門傳の豐碑なくとも、其名と事蹟とは永く汗青を照して亡びざるべし、山雉あり、墓前の桑田の中より起つ。

歸る時、竹を劈くの音を作して自働車のタイヤは裂けたり、急に修理を加へたれど、氣漏れて車體傾仄し、疾く走りがたし、盛んにガソリン瓦斯を燃やして車を行れば、僅かに委蛇して進めり、人の指笑を奈何せん、三時半辛うじて市の公會堂に到り、市の主催なる大學始業の祝賀園遊會場に入り、仙臺藝妓のハットセ踊を觀、薄暮更に市長遠藤庸治氏の邀宴に陸奥園に赴きたり。

六　仙臺美人

星、澹く簾櫳を罩めて夜氣は水のごとく微醉の顏を吹く、淺く板金剛を穿いて露光る芝生の庭を步す、秋の意の浩蕩たるを覺ゆるなり、遙に哀絲の切々たるに和して、誰が家の子かさんさ時雨を歌ふ

を聽きつゝ、仙臺の美人に就いて思ふところあり。

仙臺の藝者は、これを他の通邑大都のものに較べて其の嬌色艶姿の大いに劣れるを思ふなり、其の烟華風流の盛、これを他縣に比して遜色ある、正に是れ蓋し仙臺の矜誇なるべし、京都に觀、名古屋に觀、金澤に觀、又新潟に觀るに、花柳繁華の盛聞あるところは、皆其の鄉土の子女の籍を敎坊に掲ぐるもの多き處なり、所謂地の女の多きなり、蝶々髷の頃より絲竹の鄉に養はれて媚巧艶冶の事を習ふ、されば自ら其鄉土固有の形式と色彩とありて狹斜の特色を發揮すれど、獨りこの仙臺の藝者には、所謂地女といふもの甚だ少うして、他鄉より落拓したるもの多く、殊に東京より流れ來りしもの多きなり、漂浪の人の多き仙臺の花柳界は、烟華の情、風流の趣、これを他の地女の多き鄉に較べて落莫たるは理正に然るべきなり、狹斜の盛や決して鄉土の譽にあらず、余は此の一事に觀て、仙臺人の剛健なる氣風を知るなり。

松島と金華山の名を掲げて閑話は岐路に走り、冗漫なる五篇の遊記いまだ本題に入らざりしを、余は深く讀者に向つて謝するなり、余は遙街より聞え來る、市の諸學校學生の提灯行列の歡聲を聽きつつ、靜かに旅館菊平の一室に翌日を思ひ寢の夢圓かに、旋て曉色縹く窓を染めて、松島經營紀念會の第一日は、美霽を齎して朗かに明け渡れり。

七　鹽釜社頭の神樂

驛の歩廊は人の海なり、秋晴は小春を引いて汗薄く額に滲む、汽車は滿載の客に喘ぎつゝ東を指して走れり、鹽竈に着く折しも、多聞山の茂林の上に一しきり烟花轟き、紺碧の空に星亂れて閃青閃紫す。

新潮今や入江に盈てり、入江を埋めて幾百艘の遊舫ありて彩旗と紅燈とを懸け飾る、中に御座船型の二隻あり、一は鳳凰丸、他は孔雀丸、藩祖政宗の花の朝に又た月の夕に、浮べて燕樂したりし其の船に摸し作れるものといふ、紫縮緬の幔幕を打ち渡して、美霽の海に舞はんとす、御釜神社、鹽竈神社、文治二年七月と彫られたる和泉三郎進獻の鐵燈籠、林子平の日景石、姥杉、鹽竈櫻、貝多羅葉樹、

余には三たびの曾遊ながら、鶴游ぶ萬多奈能岡の社務所樓上の騁望は、雛島より桂島かけて、正に一幅の妙畫を披展し、風光の更に新なるを覺ゆるなり。

社前の舞臺に神樂する人ありき、舞ふ人都て四人、皆大癋見に似たる假面をつけて、頭に黒垂を被り、唐草模樣の袍に浮紋の裲襠を襲ね、下には常の袴を穿きて、腰に黒鞘鐵鍔の刀を佩びたるが、太鼓と笛の樂につれて、袂を翻し足を蹋げて環舞す、其の服裝の古奇なる舞態の悠揚なる、七分の神樂に三分の舞樂を交えたる一種のものと思はれて、余は飽かず看めたり、着けたる面の彩粉剝落して古色を帶べる、被れる黒垂の毛疎らに脱け零ちて河童の頭の如くな

れる、殊に看る人をして歡笑するを禁じ得ざらしむ、一闋終りし後、這囘は刀を拔き放ちて、相擊ち相刺すの態を作して舞ふ、此の縣の飯野川に昔より傳はれる大神樂なりと云ふ。

導かれて水族館を看、旋て孔雀丸に上る、潮平に日は麗ら、孔雀は今し千賀の浦に舞ひ出でたり。

八　孔雀丸上の棹歌

松青く岩白き箇々の島、島がくり行く百千の游船は、今日を晴れと彩旗を簇らし、日麗らかに潮を涵して茜なす千賀の海を掩ふなり、松島あつてより以來未だ曾てあらざる盛觀なるべし。

余等の乘れる孔雀丸は、小蒸汽に曳かれつゝ、桂島さして進めり、都、內裏、后島を左に看め馬放、材木、姪子、兎島を右に眺めつゝ、麥酒の滿を引く、潮は高く滿ち來りて紺碧の水や空、蟹眼と湧く酒の泡は松の翠と浪の蒼きに映り合ひて、眞珠とばり堆まれり、歡興漸く酣ならんとする折しも、老船夫九人、何れも九曜の五つ紋に袴の稜を正しうして危座り、異口同音に棹歌をうたふ、歷代の藩侯この海に遊舫を浮かべて、打魚觀月折り〳〵の游興に、歌ふて興を添はしめたるものといふ、調節甚だ優雅なり。

松島や、嵐ふくとも寒からぬ、錦にまさる島を名にきて

歌短けれど意は永く、頗る古音あり、更に鎧くどきを歌ふ、其の歌に曰ふ、

あらめでたやな初春の、好き緋威のきせながは、小櫻威となりにける、扨又夏は卯の花の、垣根の水に洗ひ革、秋になりての其の色は、いつも戰は勝色の、紅葉にまがふ錦革、冬は雪氣の空晴れて、冑の星の菊の座も、華やかにこそおどし毛の、思ふ敵を打取りて、我名を高くあげまくも、劒は函に收めおく、弓矢袋を出さずして、富貴の國となりにける

元と本歌五十首端唄四五首あり、何代の藩主なりけん、櫂歌を善くする篙師を伊豫宇和島より喚び移し、俸祿を與へて養ひ置きしものゝ、此老船夫は其子孫なりといふ、歌ひ罷む時、船は桂島の水濱に着く、素波岸を洗ひ青松峰を擁し、中に旗亭あり又た茶店ありて、別に一區の小市を成せり。

九　桂島の佳眺

酒帘の參差、茶烟の搖曳、松に傍ひ峰に倚りて別に一箇の別寰を作せる此の桂島は、松島のうち大鷹森、寒風沼に次げる大島にて、形は瑤琴の横たはるに喩ふべし、夏時には海水浴場を開きて小繁華をなすなり、村を過ぎて數頃の稻田あり、一路亂松の間に通じて鬼が濱に至る、正に外洋に面して危崖數丈、此邊の松未だ老いざるものなく、相依り相離れて枝を張り根を露はし、滿地の莓苔に蔭を敷いて狼籍たり、其の下に几案を連ねて酒飯茶果を陳ねたり、一村の鷄皆啼いて日や正に午なり、陰多く苔厚き處を選びて我も他も頂

を露はし襟を披き、箕踞して鮫殿貝宮の邊より寄せ來る千里の波に對して盃を擧ぐ、海に水鳥、大黒島、船入島、二ッ島の青螺數筒か浮かびて、風煙縹渺たり。

午餐を終へて又孔雀丸に上り、直に五大堂を指して進む、今宵の烟花、流燈、漁船の炬火行列、船俟武太を觀んとして海に浮かべる無數の遊舫の間を過りて、雄島を左に行く折しも、福浦島の彼方より、丘のごとき大鯨の潮を噴きつゝ、數丈の大鯛と相並びて波を揚げて進み來れり、忽ち見る魚の背兩つに割れて華やかなる舞臺を現じ、絃鼓の聲の湧くうちに、彩衣の舞人、章魚、河豚、比良目の鬘を被りて踊り出づ、こはこれ所謂舟俟武太なり、歡呼の聲海に充てり。

大觀山の白鷗樓に少憩して、更に導かれて五大堂を觀、瑞巌寺に詣る、袖を聯ねて幕をなせる門前咫尺の熱鬧場は、門に入ること一歩にして岩樹幽閑の寂土となり、風韵禽語も亦皆梵唄の聲を爲すなり、時頼入道頂禮し法身和尚趺坐し、陰寒の巌穴、蚌燈豆のごとく如法の冥を照すのところ、瓦鉢に落泉を汲んで黄粱を煮、共に啜りて直指人心の妙道を語りし法身窟は、石髓今も尚乳のごとく垂れ、爛斑の苔苔は七百年前の古香を吹くなり、山に層々の窟を穿つて、壁に浮圖梵字を彫れるは、元四方の雲衲の棲みたるところなるべし、巌華甚だ寂寞なり。

一〇　瑞巌寺と雄島

弦月の冑の前立、漆黑の鎧、手に麾扇を執つて胡床に據れる藩祖貞山公の木主は、帳幔深く鎖せる香龕の中に在り、金猊焚き來る卍字の白檀香、其の末絲を成して低迷するところ、威容儼然人をして覺えず襟を正さしむ、間毎〳〵の襖壁には、當時の巨匠永德山樂一流の雄大なる繪畫を連ね、輪奐の豪宕なるは、實に禪門伽藍の規模に桃山聚樂の形式を加へ、渾然として陶冶したる一種の手法を觀るべく、中にも藩祖が豫め至尊臨御の時あるを想ふて作り成したりと傳ふる御座の間の、明治九年先帝東巡、始て劔璽を奉安せる奥殿の天井の、百人の甲士を伏するを得べく作られたると、御成門を入りて大玄關の、方石を甃して甎に代へ、矩のごとく一曲折して正殿に通ずるの制は、他に其の類例を見ざるところ、壁上楣間の彫刻物と共に、雄渾にして偉麗、當に禪門的規模と桃山式手法とを打つて無縫の瑠璃寶塔となしたるの觀あり、縱へ好古探幽の客ならずとも、低徊顧望して去る能はざるべし。

雄島の朱欄干の渡月橋を渡りて、藥師堂見佛上人坐禪堂に詣り、更に寧一山の撰するところ賴賢の石碑を觀る、德治年間に建つるところ、筆致の清勁と鐫法の殊妙なるとは、其七百年前の古碑たると共に誠に國寶なり、惜むらくは蟹風蜃雨の剝蝕するところとなり、字態や漸く銷盡せんとす、覆宇を置いてこれを庇はざれば、恐らくは終に沒字の碑となるべし。

還りてパークホテルに憩ひ、仙臺藝妓の舞踊を觀たり、ホテルは實に松島公園經營の第一着手として新に建てられたるもの也、其の外觀を邦式に內部を洋式にして、以て四圍の風光と調和を取れりと稱すれども、矩形に立てられたる二層の樓閣、丹塗の欄干を繞らし、中央に八稜形の五層樓を起せるは、支那風の臺觀とも又邦式の五重塔とも分らざる不思議の形式にて、其品致の雅遒ならず傅彩の優嫻ならざるは、當に明媚の風光と相容れざること甚だしきを惜むなり、彼は禪關これは酒家、彼の瑞巖寺を採つて論議するは頗る匹儔を失ふに似たれども、和唐和洋、其の二箇の手法を取つて一箇の形式を成せるは則ち相同じ、今の藝匠、終に遠く昔に及ばざるか、亦悲しむべからずや、聞說くこれ獨逸人某氏の設計するところなりと、宜なる哉。

一一　松島の一夜

白鷗樓の亞字欄干に凭りて宵の松島を觀る、黃昏るゝ島影の次第に澹墨の滲み行くごとく黑き潮のうちに消え行く折から、灯あり五六點、やがて十點二十點、一轉瞬の間に百二百と數を增して、やがて恆河沙の灯は漆の海に充ち滿ちたり、見ゆる限りの島々には篝火を燃やし、舟に又磯に、幾處か烟火を打ち揚ぐ、金虹紫虹、空に繪がき波に彩るの時しも、海山煥として燃えんとし、夜を十里の外に攘つて、素波を繞らせる淡島、翠繖を張りたるおぼろ松の、幻とば

かり浮かび出づるを見る、三百艘の魚舟舳艫相啣み、舟毎に松明を簇がらして、潮黑き海の眞中を一文字、紅蓮の炎に描き成したる炬火行列の壯觀は、鮫殿貝闕の魚籠脊屬、什麼に驚異の眼を睜りて看めたりけん。

華やかに賑しき夜は明けて、天は好霽なり、朝八時、余等は又孔雀丸上の人となりて鹽竈に還り、更に汽船白金丸に上れり、大乙壇上、神鹿花を啣んで立ち、少眞竈邊、仙猿藥を搗いて遊ぶといふなる金華山に、今日はしも往かんとする也。

三　金華山

昨は佳麗なる松島の顏を前に觀、今は清楚なる松島の姿を背より看む、平波駘蕩たる昨の觀めは、長濤澎湃の今日の看めなり、昨の觀めを沈香亭北欄干に凭れる醉楊妃の豐艶なるに比するを得なば、今の看めは吳王宮裏の醒夜來の清麗なるに喩ふべし。

吾船は松島灣を出で、太平洋の上に浮かべり、翠黛滴るがごとき大鷹森の峯頭は、長揖して吾一行を送るものに似たり、搖曳せる一片の雲は領巾とばかり、遙靑一堆依々として終に風煙のうちに入る、十時、石卷、渡波を望みて船は牡鹿半島に傍ふて進めり、左舷には靑山緩やかに裾を曳いて、蜃莊蟹舍其間に綺錯し、右舷は積水洸洋として直に南溟の天に連なる、荻の濱の沖を過ぐる頃より、濤や漸く高く船を掀揚せり、今まで甲板の上に談笑しゐたりし人の、一人

去り、二人去り、船房に這ひ入りて困臥するなり、船僮ブリキの碗を重ね抱いて、枕籍せる人の間を跑奔す。

半島の尖端鮎川の山嘴永く海に入るところ、美しき弧線を曳いて秀容さながら富士の山に似たるの峯を見る、雲樹蒼々として太だ異趣あり、舟夫呼んで曰く金華見ゆ金華見ゆと、余は平昔此の山の孤峭尖青、喩へば繪に見る蓬萊山に似たるなるべしと想へり、今や親しく孱顔に接して、夢裡に見たる山と同じからざりしを覺れり、田代、網地の二島を右にして船は磯近く進みたり、此の邊、一帶の峭壁、巖は斧劈を疊み樹は米點を描き、大濤これに激して銀山の頽るるに似たり。

十二時、舳は北を指して山雉の渡の海峽に入る、金華山眉を壓して立てり、船は中流のところに錨を卸し、汽笛數聲の獅子吼を發して舟を喚べり、唯見る二隻の舟あり、享午の日影に耀閃めかして、渦まく潮を押し排けつゝ箭のごとく漕ぎ來れり。

一三　黃金山神社

山雉の渡、何ぞ其の名の優雅なる、鮎川の村と金華山との兩渡頭、其の間は廣さ二十町ばかりの海峽なり、名にし負ふ太平洋の長濤の吐呑するところなれば、山の裾、村の磯、波は不斷の雪を噴いて、中流は紺碧の色鮮かなる急潮の去來するなり、余が一行を載せたる舟は、潮を趁ふて斜に彼岸を指して進めり、舟中に箕踞して騁望すれ

ば、樹色潮光長峽に充ちて、風煙繪がくがごとく、座ろ大江を渡るの想ひあり。

舟は金華の山に着きたり、磯に敷ける花崗石の、大いなるは米苞とばかり小なるは饅頭ほどの、赭きあり縹きあり、又は碧に白きを交ゆるものありて、燦として午日に光る其の美しさに、余は塵土を踏んで穢れたる吾が靴の第一歩を、此の玉敷の磯に印すに躊躇ひたり。

祠人、村の長、郡の長等に迎へられて山に上れば、芋綿たる芝草の青く烟り、梢は雲を拂ふばかりの老松や千歳の苔の衣つけたる巖など、自からなる妙畫の意に布置せられ、其蔭に鹿や小麋の悠々として遊ぶあり、人遠く世迢に、恍として古への蓬萊瀛洲のさまを憶ふなり、村の人の頒ちくれたる白燒の煎餅を把りて試みに鹿を喚べば、洋服姿の異樣の男の余等が群を、見るに慣れざる此の山姫の僕婢等は、愛らしき眼を瞪りつゝ凝立して馴近づかず、奈良、嚴島に棲める遊鹿の、毛の色黝く穢れて體の羸瘠せるを見たる余等の眼には、此の山の鹿の毛の色赭くして潤澤あり、斑文の鮮かに皓くして明麗なるに驚異するなり、奈良、嚴島の鹿の、僅かに雪花菜の團子に養はるゝに反して、これは山果林菜、儘自然の境域に優游しをるが爲めなるべし。

導かれて黄金山神社の社務所に入り、棲鳳閣の下に憩ふ、庭に丹頂の鶴を豢へり、時に翼を張りて鳴く、山靜かにして太古に似たり、

一四　宛然たる仙山

金華の山、山は五つの峰に分れ、水は四十八の溪に派れり、高さは海を拔くこと一千四百尺にして、周圍は五里の石磯を帶べり、危磴嵐を穿つて中腹に黃金山神社を奠め、鳥道雲を貫いて上峰に大渡津見の祠あり、聖武の帝の御代、陸奥の守百濟の敬福始めて黃金を貢ぎし、帝東大寺に幸きして親しく三寶の前に歸命頂禮したまひ、大伴の家持歌を作りて、黃金花さく聖代の瑞を頌したる陸奥山の此の山なりとは、遠き昔の事にして史籍つばらに尋ねがたけれど、祭秩代々に隆かかりしを見れば、邈古の世より斯の神の既に永く此の山に鎭坐ましましを知るべし、中古佛敎の盛時より、浮屠擅ゐまゝに辨財天を祭りて莊麗なる伽藍を立て、大金寺と稱したりしを、明治維新の時復た元の黃金山神社となる、實に此の山や我が日の本の東の海に聳え、霞は初日に蒸し濤は萬古に鳴る、氣象雄大、當に大渡津見の神の宅して以て東海を鎭するの處なるべし。

八十疊敷の客殿に余等は午餐の饗を受けたり、絕えて女人なく、袴つけたる男どちの給仕する誠に心地好し、終りて皆な結束して山に登るの裝ひす、人毎に新たに裁したる浴衣に添へて一箇の竹籠を頒ち與へ、衣袴を收め容るゝの用に供へしめたるは、其紛亂を防ぐの方法として誠に簡便なり、日頃多數の參詣者を待つに慣れたる故なるべし、人皆な浴衣兵兒帶の輕裝して草鞋を着けたり、余は獨り

洋服の下着を其の儘の、縮みの半襯衣股引して行けり、浴後新裁の衣を着くるの快適なるを思へば也。

白苔、繡ぬふに似たる古磴の露を踏んで行けば、斷礎斗のごとく並立てるを見る、明治三十年二月炎上したるの址也、これより上は雲木蒼々、路や漸く嶮なり、鹿あり其の脊の上に鴉を載せて遊べり、鴉や連りに剝喙すれど鹿や關せざるものゝ如し、怪しみ問へば曰ふ、毛に栖む虱を喙ばむなりと、誠に仙境なり。

一五　峰頭の大觀

山には松多く杉多く檜榉また多し、梢は雲を掃ひ根は石に入る、樹の老蒼なる石の雄偉なる、斧も鑿も終古此の山には入らざるなり、喩ふれば奈良の嫩草山の幾個を重ねて、笠置、山寺の石を置き、木曾山の樹を移したる山と想はゞ此の山の眞趣を彷彿すべし、海や寒潮と暖潮との相撞き相交はりて流るゝところなれば、水氣氤氳として雲雨多く、常にこの山の木物を潤養するなり。

巖樹の間を登ること十六町にして、始めて山の頂に達す、大海祗の祠あり、祠前の巖に踞して騁望すれば、牡鹿半島は指顧の中に在りて遙に松島幾箇の青螺を看、岩代磐城の山、翠鬟杳として風烟の外に立つ、前には江島、網地、田代の諸島ありて巨鼇の浮ぶがごとく、天は積水に垂れて萬里涯まるところなし、人は寒霞溪、鳥羽日の山の眺望をもて之れに比すれど、氣象の雄大なるは匹ふべくもあ

らず、正に虚に馮り風の御するの想ひあり、看ること之れを久しうして自然の靈威の人に迫り來るを覺え、余六尺の小丈夫、孑然たるこの巖頭の小蝸牛と成り了するの感をなしたり。

日出を觀るに好き旭日石、夜紫金の異光を放つといふなる夜光石、黄金石、この山第一の名石と稱せらるゝ白石英の天柱石、千疊敷と呼ばるゝ石磯、巨巖壁のごとく立ちて下に千尋の深淵ある千人澤、銀波越、金波越、鮫窟貝殿此を去ること遠からざると思はるゝ大函崎、小函崎の奇勝は、日漸く暮んとして時雨をさへ催したれば、愛を割いて觀るに及ばず、別路を取りて山を降る、路、草青く石蒼き無雙峰を過ぎ、更に幽溯に傍ふ、落栗多し、深樹のうち時に猿の啼くを聞けり。

此の夜の酒筵に漁婦の舞踊を觀る、淺葱の紋附着たるもの二人、紅纈纈の衣を着たるもの亦二人、春には舞鶴裳には寶船を染成した る大漁祝の衣つけたるもの一人、一人太鼓を撾ち四人交も舞ふ、漁歌蜑唱、其歌ふところは解しがたけれど、歌調や、悠揚、舞態や蹣跚、共に野趣横溢す、好詩なり又妙畫なり。

一六　鳳栖閣に宿す

夜闌けて鳳栖閣の下に宿す、短檠澹く高麗縁の青疊を照して、簾櫳深く鎖し、屏風緩やかに繞り、何來の風の木犀香を傳へて、細々として坐に入るなど、人をして古典的の興趣を懷はしむ、被ぐ絹夜

具敷く絹蒲團、日頃は惡臥に習れたる余等は唯だ靜かに枕を引いて相語る、やがてうつら〳〵と夢に入る時、大雨遽に降り來り、濤聲樹聲を挾んで勢ひ猛に四簷を打てり、雷さへ鳴り渡りて、紫金の電この海山の闇を劈いて飛べば、閣を繞れる玻璃障子に夜山の影の皪崢たるを掣出するなり、衆皆息を屏して一語を出すものなし。

睡ること幾そ時ぞ、輕寒の蒲團に上るに目覺れば、雷雨何時しか霽れ、月光櫺子の間より漏れて水のごとく枕を涵せり、窓を推せば缺月一片懸けて老樹の枝に在り、正に二十三夜の月なり、雲縹く、煙白く、月華聲なく中庭に散落す、遙峰時に鹿鳴の呦々たるを聞けり、幽懷綿々、余は終に此の夜を忘るゝこと能はざるなり、寢ねずして曉に至る。

朝八時、小笹一株、石一顆を採り得て好箇の紀念となし、終に舟に上りて此の美しき金華の山を去りたり、石卷の沖を過ぎて首を回らせば、海氣縹渺のうち、桔梗の花の色に冴えたる此の山の尖峯を見る、朝霞晩靄、凝紫の色を堆むるは花崗岩質の山のみなり、筑波山然り、八ヶ岳然り、駒ヶ岳然り、中國の諸山亦た然り、石英雲母長石の相交はれる此の石の綺錯して日光を反映するが爲めなるべし碧海の上、青冥の下、擎げ出す此の紫一堆の山を、心の往くまゝに耽看して終に松島灣口に至れり、余は宮城縣人が松島公園を經營するに當りて、金華山を其境域の中に加へたる見識を贊嘆す、松島の

精神は實に鍾して此の山に在ればなり。

宮城縣の官民、今や多年企劃したる松島經營第一期の事業を成就したり、更に鹽釜灣の修理、桂島より船入島かけての外港築造の事業完成するに至らば、其の東北開發の盛業に貢獻する當に多大なるべきを思ふ。（大正二年九月）

天狗栖む山

一

時雨るゝ日の朝、二荒神社の社頭に立つて宇都宮の市街を騁望す、廣重の繪に見る方錐型の黑き火の見櫓と、ボールの函を累ねたるごとき鼠いろの活動寫眞館の淋しき疎雨の外に立てるは、過去と現代の相持して交綏するさまとし觀らる、市長いふ、昔は七木七水八河原と歌はれたる此の市に、唯だ二木のみ殘れりと、指さす邊を遙に見れば、摩天の銀杏樹ありて黃葉薄陰りの空に繡ふ、其の陰や正に滿地の黃金を敷けるなるべし、城址に傍ふて老いたる欅の空を挿す

あり、葉全く落ちて巨人の手を載にして立つがごとし、地に近き幹の廣さ疊十二枚に餘れりといふ、市の長者は此の二木なり、老樹舌なけれど過去の宇都宮を語る。

宮と名のる此の町は、半ば二荒神社の境域なるべきを憶はしむ、白苔石を蝕める溝渠市の中を串いて、湧く玉の水清らかに流れたる、正しく昔は珠垣の外を繞れるみたらしの水なりしなり、宇都宮は當に一の宮なりしを知る。

旗亭六三四に縣知事市長新聞社市の縉紳の邀宴に列せり、洽歡の盛意謝するに堪へたり、余、謝辭を述べて曰ふ、昔の毛の國、那須の國、慈覺大師の生れし國、秀麗なる大自然に德川初代の文華の精髄を象眼したる日光山を有てる國、栃木といひ都賀といひ、豐多なる森林より大江戸の竈に爐に薪炭を供給したる木の國、今は水力電氣を送りて首都の電車を動かし、二百萬市民に交通の利便を寄與する水の國、武藏野の草に連なる毛の國の黃茅白芒、利根、鬼怒の流れはあれど古來唇齒の國なるべし、此の行實に天狗栖むてふ古峯の山に遊ばん爲めなり、此の物翔りて千里の外に行き、座して千里の外を見る、正に飛行機と千里眼の奇能を備へたり、新聞記者の職や順風耳、千里眼たらざるべからず、乃ち古峯の山詣では、實に多大の興味と愉快とを有つなりと。

宴罷んで日は斜なり、車を促して誓願寺を過り鐵卒塔婆を觀る。

正和元年孝子其の母の冥福を修する爲めに建てたるもの、字體甚だ穆茂、鏽華爛斑して古色掬すべし、正に六百年前の物なり、亦た珍重すべし。

二

車頭行く〳〵尖白の一峯、亂山の中に抽くを指點しつゝ鹿沼の驛に入る、雪の白根山なり。

黑川の名にも似ず、瀨には白を噴き淵には藍を湛ふ、其川に傍ふて、豐秋の夕榮黃なる負廓の稻田幾千頃、もみぢする三鴨、多氣、深岩の山は風烟の外に匂ひて、刺繡せし屏風とばかり圍みたる其の中に、鹿沼の町は竈の烟賑はしく黃昏れ行くなり。

導かれて先づ麻絲會社の工場を觀、更に稻子の雨のごとく飛ぶ田の道に車を連ねて菊澤神社に詣づ、萬里小路藤房の三衣一鉢に身を窶して世を遯れ、不二行者と名のりて棲遲したるの山は是れなり、春花秋楓、久しく年所を歷たりし後、里の人山陰の荒草裡に苔に爛れし石卒塔婆を索め得て之れを發き、古鏡一面古錢數十百枚を獲、古き記錄と口碑とに據りて藤房卿の墳なりしことを知り、其の址を修築して之れを祀りしが、今や縣社に列せられしとぞ聞く、此の鄕晩年の事蹟は杳として尋ぬべからず、妙心寺第二世の授翁こそ其の人なれと言ひ傳はれゝど、徵證や定かならず、雲の悠々、水の迢々、この山、此の里、或はこの人の草を結び鉢を置きたるところなるべ

さか。

川の瀬の蛇籠に碧はせかれて、亂紅點破す落葉のいろ〳〵、山の秋や濃やかならめと心竊に樂みつゝ、同じ流れを渡ること二たび、やがて菊澤の山の麓に車を捨てゝ、黄葉紅葉の林を行く、花崗岩の霧爛して霜柱を踏むに似たる山路の險しさは、木を横たへて頽るゝ土を防ぎ留めたる堦に、人は喘ぎて逡巡はざるはなし、傘を杖に佇む人々、其顏は美酒に醉へるごとく赤かりき、落日三鴨の峯の端に春づきて、反照楓林のうちに入り、山や煥として燃えんとするなり。

拜殿の冷たき床に鶉のごとく肩を並べ危坐の踵を重ねて、祝人の祝詞を聽き、交る〴〵玉串を捧ぐ、拍手四邊に谺して四手掛けたる眞榊の蔭、燈明に煤なく御鏡の青光る、土器に黑く滲み行く冷やかなる神酒を受けて、秋の心の沁々と身に迫るを覺えたり。

大盃といふべからん、人の掌ほどの楓葉を帽に翳して、黄昏る鹿沼の町に入り、町の縉紳の邀宴に列し、夜闌けて旅館に入る、曉いと寒し、窓を推せば簷の霜は宛ども雪かと疑はるゝ也。

三

今日は天狗栖むてふ古峯の山に賽する日也、先づ今宮の社に詣る、群雀の趾狼籍と印されたる石磴の霜漸く晞いて、秋晴の日の溫かさは春のごとし、後れて到れる余は端りなく路に迷ひて、丘に依れる唯ある茅の門に入れり。

如何なる人の棲めるならむ、紅纈纈の山茶花今を盛りと咲き亂れ、箒の痕の鮮かに青海波を描ける路其間に通じて自から人を延く、庭に入れば一面の高麗芝、絲遊の立ち胡蝶の舞ふ風情に日南を受けて秋麗らかに、石に依る竹、松に傍ふ石燈籠、何れも繪の心に布置されて、短籬砌を劃りてダリヤ、コスモスの圃となる、飛石傳ふて歩みを移せば、彼方の離亭に白髯の老翁ありて、長閑に煙管を啣へつゝ緣の邊に負暄せり。

余近づきて帽を脱し、安りに幽栖に屐を入れたる無禮を謝すれば、翁は皆の皺を深めて歡笑しつゝ、予老餘花を栽ゑて儘ま人の看るに任せたり、好くこそ來たまひしと袵を移して余に進む、齡を問へば曰ふ八十六と、正に此の町の長者也、眉毫長きこと一寸、視聽尙ほ明らかに、具さに壽相あり、四十にして鰥、五十にして酒を斷ち、唯だ煙草を好む、食物は何の嫌ふところなしといふ、床の間に落花鴛鴦を繪がける幅を懸けたり、誰が描くところぞと問へば、此の町に住める青年畫家漣洲といふ人の筆なり、欲しくば參らせんといひつゝ、箒の先にこれを卸して卷き與ふ、何處の誰とも相識らざる余に、愛を割いて與へたる其の恬澹にして無欲なる誠に欽すべし、されど余、これを受くるの理なければ、一向に辭謝したれども肯かざれば、長者の意に戻らんことを恐れて收めたり、事物に執着せざる、應に養生の要訣なるべし。

車を連ねて古峰の山に嚮ふ、行く〳〵黒川に傍ひて深岩の觀音山の下に車を停む、全山皆な石、巨岩空を挿して立ち、松蘿其の上に點綴して峰勢甚だ奇峭、山腹に洞窟あり、中に白衣大士の龕を藏む、石材會社ありて山の石を伐り出せり、繪がくべく詩すべき山も、亦幾年の後には風趣を損ずるに至らむ。

四

路、東大蘆の村に入りて引田の銅山を觀、黄葉紅葉の山に對して行厨を開く、此の山の故の主、採掘年を歴れど好き鑛脈を索め得ずして其業を棄てたりしを、新主、故坑を尋ねて鑿を入るゝこと六尺にして豐富なる鑛脈を穿ち得、產額日に多しと、運と不運と相隣ること僅かに六尺、福の去來は應に不斷の努力にあるべし。

霜に枯れたる草は柔かにして氈のごとし、上に青き莚を敷き、人々皆な箕踞して餉を傳ふ、折りから雨細く降り來りて紅葉の色ことに濃やかに、風斜めに吹き零して、汁も膾も皆露なり紅葉なり、此の村戸數六百、麻を栽ゆるもの四百戸に上り、年額二萬三千貫の麻を出すといふ、老婦を倩ひ來りて製麻の作業を觀たり、水に漬けたる麻の莖を四五本づゝ束ね持ちて其元を折れば、皮は見る〳〵末へと剝がれ行く、更にこれを斜めに立てし小さき板の上に載せ、青竹の篦をもてこれを扱けば、麻の疎皮全く去りて眞皮のみを殘し、忽ち美しき澤を生じて絖を展べたるさまに似たり、古拙なる此の手工を

用ゐんよりは、機械の力を借りなば更に便利なるべしと思はるれど、斯くしてこそ其の天然の美質を發して、大蘆の麻の名ある所以なりといふ。

鹿沼の人と車上に訣別して、直に古峰神社に嚮ふ、路は常に黒川に傍ひたり、蹙勝五郎の雨宿りしたりといふ大欅、源頼朝公の愛馬磨墨の生れたるところといふ馬頭觀世音の小祠を看て、行く〳〵數箇の村を過る、此の邊の農家、家に傍ふて多く黄菊を栽ゑたり、其花を蓆に摘載せて日に晒す。菊膾の料とするにやあらん、又コスモス多し、菊の村、コスモスの郷、鹿沼より六里にして旋て古峯の山の麓につく、大蘆川、水肥えて石瘦せたり、奔湍や澄潭や、數々車を停めて看めたり、川の右岸に稲田廣く開けしを見る、二宮尊德先生の、曾て荒蕪を闢きたるところなりといふ。

麓の茶亭の縁に憩ひて、人々山に登るの支度をなす、靴を草鞋に代ふあり、杖を求むるあり、余等數人先づ發す、溪に傍ふて登ること五十八町にして古峰神社に詣るなり、行くこと數町、橋斷へて行くべからず、石と石とに架けられたる柴の小橋を危くもふみ渡りて、彼岸の峰の陰を行く、滿山の黄葉紅葉、今し夕日に照されて燦として燃えんとす、濃淡の紅の色を盡し、淺深の黄の色を盡し、紫酣し朱眩し、綺錯して峰を彩どる其美しさ、唯だ恍惚と杖を停めて、綺麗〳〵と呼ぶのみなりき。

旋て黄昏の松並木を過り行けば、暮れ殘る谷川の水微白く、其處に一板橋の架されたり、一境忽ち豁けて茅葺屋根の大厦を見る、これ古峯神社、雲縹く杉黑し。

五

巴の紋を染抜きたる幔幕しぼりし大玄關に靴を脱ぎて、導かれて老鼠の啼く音に軋しむ廊下の黄昏を度りて、谷に枕みし疊三四十枚ばかりの一室に入る、團參の人の一夜を籠もる座敷と覺しく、こゝにも障子の外に巴の紋を描きし白絹の幕を張りて、秋の宵の薄ら寒を防ぎたり、正面には巨觥なるべし紅葉の楓を大花瓶に投挿し、常陸山、太刀山の膂力をもてするも、扛げがたしと思はるゝ大いなる青銅の獅咬火鉢に、炭火白き焔を揚げ、沸れる鐵瓶谷の水音と共に鳴る。

旅衣脱ぎ捨てゝ、釘の頭の微白に光る長廊下を走り〳〵て湯殿に入れば、岩清水を湛え沸せし檜風呂、數人並び浴して餘りある廣さにて、心地好きこと言はん方なく、殊に樋をもて泉を槽に引き、盈ち溢れて氷を割つて立てたるごとく落したる、これに增したる深山の饗ひはあらずと思はれたり、褞袍を襲ねて胡坐の膝を搖合すほどもあらせず、若き男素敏くも膳を運びて人毎に一陶の酒を添へたり、山の肴、木の子、石豆腐、鵜の炙きたる、殊に手碟に盛られたる香魚のうるかに似たるもの、何かは知らず酒を下すに妙なるを、社人に

問へば鵜の腸の鹽辛なり、深山の珍饌は之れに十々目を刺したり。

古峯神社、昔は日光山の管領するところなり、世々石原隼人なる人此に住めり、其先は役の小角に事へし修行者にて、即妙童鬼が子孫とぞ言ひ傳ふ、日光山に行く修驗者、先づ古峯に詣でゝ一宿して山に入る古例ありしが、維新の後、神道に歸し、日本武尊を祀る、社に御衣の袖を藏すと傳ふ、昔より火を攘ひ盜を防ぐの靈驗炳焉たりと稱せられ、三州の秋葉三尺坊、武州の三峯、信州の戸隱と共に、世の尊崇を受くるところなり。

煤に黄みし夜闌の障子を震ひ搖かして蓼々と太鼓は鳴りたり、祈禱の式の始まるなりき、行き見れば正面玄關より直奥の神龕の前、廣き社殿の何處より人の集まりけむ、一對の繪蠟燭幽けき光りの夜寒に戰のき顫へる邊、おぼろに數十人の客ありて蹲踞せり、白衣の祝人祝詞を奏し、終りて又も太鼓を鳴らして式を了る、散じ去る人の跫音昏の廊下をとゞろかして、遙に〳〵消え去れば、夜は漫々と鼠の走る聲もなく闌けて行くなり。

鶯箋白扇など持來りて字を乞ふものあり、二三の人と即興の詩俳を題す、中に金蒔繪象牙柄の女持の扇子あり、一行中の長者戸川殘花翁をして字を書せしむ、聞說く社主の室氏は大木遠吉伯の令姉にて在すよし、此の扇そも誰人の物にかありけん。

窓を推せば、杉黑き峯の端に月あり牙のごとし、夜氣森然、正し

く天呉夜驕るの境と思はれたり、詩を懐ふて寝ねず、余は終に此の一夜を忘るゝこと能はず。（大正二年十一月）

釜無川の水源探勝の記

一

秋立つといふ日なり、信州富士見驛に近き御射山の、小川射山の別墅歸去來莊に行くの約あり、午熱の隧道の苦惱を想ふて夜の間に甲州の山を過ぎんと思ひ立ち、晩涼を趁ふて先づ淀橋なる家弟の摩尼村莊に行き、こゝにて旅裝を理む、旅裝といへど他の奇なし、カーキー色の麻の洋服、麥稈帽子、地圖と手帳と萬年筆と、手拭楊枝石鹼半紙を容れたる信玄袋、一本の洋傘と一枚の薄き毛布と唯だ是れのみ、別に脚半と足袋と草鞋一足とを携へ行く、田舍の草鞋の溪

山半日の行程に既や摩敵して用ゆるに足らざればなり。

夜の十一時半、新宿驛より汽車に上る、豫て同遊を約せる久保天隨の此の列車のうちに在るなるべしと遍ねく搜し索めたれど、其の人の姿は見えずして、端りなくも工藤日東の其友黑須醫學士と在るに逢ひたり、亦射山の檄を得て富士見の山莊に赴くの人なり、車上此の好箇の談敵を得て太だ岑寂たらざるを喜ぶ。

月の中澣、射山同好の士に檄を傳へて富士川上流釜無川の水源の奇勝を探らんといふ、溪に溯りて行くこと二日程、行く〳〵溪魚を漁し山菜を採りてこれを食ひこれを茹ひ、駒が嶽の中腹に露宿し飽まで浩蕩たる澎氣を呼吸せんとする其の擧や誠に壯快なり、余は一議に及ぶべうもあらずして贊成す、一味の人の顏觸には、不折、豪溪、蓄堂、天隨、犀水、兜山を始めとして、甲斐の先鐘、鶴城、半仙を加へ、桂月、天溪も亦此の行に入るなるべく、一隊の豪傑十餘人と註せらるゝに、坐ろ遊意の踴るを覺ゆるなり。

二十一日の曉は鹽山の邊に明けたり、媒烟に塗れ黝みて吾も他も昆侖奴のごとき顏を甲府の驛の洗面所に洗ひ淸む、朝の風秋に似たり、殘夜の夢を宿すに似たる月見草の花、桔梗の花、親しげに愬より人を窺ひつゝ搖れて行く、眼は鮮かに醒めたり、毛布に身體を裹みつゝ榻上に趺坐して窓外の山を看る。

二